334-150

歐洲繪行脚

41.11.25

緒言

自分は畫を描き始めてから、彼是既に二十餘年になるが此間、學資をつかつて、一心不亂に勉强したのは僅に四五年のことであつて、何時か知らぬ間に畫筆を握つて渡世する一種の勞働者となつてしまつた。這んな境遇に落込んでは本統の畫が容易に描ける筈がない。畫を描くことが既に職業となれば濫作をやる傾は免れない。濫作は遂に單調、平凡、月並に陷らしめねば措かぬことは極まつて居る。獨り繪畫のみで無い。詩歌にせよ、小說にせよ、有ゆる藝術が斯ういふ運命に陷るのは、實に已むを得ぬことである。自分もこんな經驗を沁々味つて、遂

に自己の作品に厭きて來たと同時に、自己の生活狀態が餘りに平凡。單調なのに倦み疲れて了つた。そこで作品の單調。月並を破るには、先づ自己の生活狀態の單調。平凡を破らねばならぬと深く心に感じた。こんな動機からして、一昨年の秋、不圖思ひ付いたのが歐洲寫生である。その目的は唯だ新らしい變つた作を得やうといふのみで無く、山川。氣候。風俗。人情の異つた外國を旅行して、倦み疲れた自分の生活狀態から、今少し拔け出たいといふ切な希望であつた。平素都會紅塵の裡にのみ生活する人達は、少し邊鄙な田舍か海岸にでも行けば、同じ日本國でも、全く氣持の變つた生活狀態に移ることが出來るかも

知れぬが、然し自分等のように絶えず、處々方々へ旅行する者にとつては、中々變つた新らしい刺戟を得ることは六づかしい。それで今度の歐洲旅行は別に豪い抱負も何も有つたわけではなく、言はゞ朝から晩まで極まり切つた仕事を遣つてゐた提灯屋の職人か、僅の暇を得て、伊勢參宮に出懸けた位のものであるが、然し實際出懸けた當人には、一寸口や筆で表はすことの出來ぬ趣味もあり、利益も有つたと思はれる。兎に角總てが無駄骨折でなかつた丈は確かである。それに丁度隣村に遊びに往つて、自分の村の良い所や、惡い點が解る樣に、今度諸國を歷遊して、歸つて初めて日本の特長や、また缺點が明らか

に目に見える氣がする。

想ふに今後は世の藝術に携はる人々も、日本といふ小天地にのみ滿足しないで、外國へ踏み出す者が、漸々多くなるであらうが、其中には歐洲へでも行くといへば、非常な大抱負を無理にも押し立てねばならぬ乎の如く心得、隨て却々容易に斷行の出來ぬ人もあるかも知れぬ。然し何にもそんなに力き身上る必要もあるまい。唯だ漫然と出懸けて可からう。行つて見れば、此方で豫期した以上の强い印象が到る處にあつて、意外の刺戟を得、感興油然として抑へ切れないものあるに相違ない。若し不幸にして何の感興も湧かず、得る所がなかつたなら

ば、既に此方が死んで居るので、さうなつては遺憾ながら何處に往つた所で仕方がない。苟も藝術に對する精神が活きて居る以上は、必ず大なる獲物のあるは確かである。

世には歐洲旅行と云ふと、莫大な費用を要するものと思ふ人もあるが、其方法一つで存外安上りに行く。元來日本人の歐洲旅行は一般に贅澤である。自分は赤毛布。或は彌次喜太式などゝ云つては居るが、却々以てさうでない。本國に居ての御互の生活程度以上、遙に贅澤を盡して居る人が多い。一例を擧げても三等列車で旅行する人は、歐洲には先づ無いと見做して差支あるまい。三等列車に乘込むでは、第一、日本人の體面に關

すると口には云ふものゝ、これは表面の口實であつて、實は虚榮心が三等列車に乘るだけの勇氣を許さぬのである。

僅かな時間を潰す滊車でさへこの通りであるから、旅館料理屋を始め、總て其他旅客の費用にかゝるものも、皆その比例に準じて容易ならぬ譯である事は知れて居る。茲に於て洋行こは實に莫大の費用を要するもの、又た滅多に企つべからざるもの、如く思惟し、歐洲旅行を企て得べき資力のある人々までが、終にその目的を果さずして止むが如き場合が無いこも限らぬ。これ全く彼地の一面のみを知つて、他の半面を知らぬ處から起る誤解であつて、誠に遺憾千萬のこと、云はねば

ならぬ。

元來畫かきの旅こ云ふものは、內地に於てすら別段に外見を飾り、贅澤を盡す必要は無い。旅行は此方の遣り方で、其費用は幾くらでも節減される。內地ですらそれであるから、萬事諸式高價な歐羅巴では、尙更のことであるべき筈である。無論自分もこれ等の節減主義が、誰にも適するものこは、決して思はぬ。例へば相當の官職に居るこか、或は地位のある所謂御歷々の人々は、確に本國の體面にも關する譯であるから、そこは無理算段を爲し、痩我慢をしてもそれ相應の事を、やつてもらいたい。併しそんな心配の無用な、畫家仲間の旅行に至つては、出

來るだけの節減を守り、なるべく自由に、成るべく呑氣にやつてもらいたいのである。

元來自分の考がさう云ふ風であるから、今度の旅行も極く簡單な繪行脚的旅行であつて、自分等如き普通の日本の画かきに相當した方法でやつて來た積りである。處でその旅行中の出來事は、昨年から今年へかけての美術新報紙上に連載したが、完結に至らずして止むだ。今度歸朝してから、美術新報編輯部諸氏が、是非一緒に綴つて出版せよと勸誘されたので、終にこの書を拵らへることになつた。然し唯茲に御斷を要するのは、普通一般歐洲見物の案内書と違つて、唯だ何の理屈も無く氣の向くに從て、彼方此方と逍遙ふた、其途中の出來事を記したのに過ぎぬ素朴な旅行記である。併し此質朴な旅行でもやつた當人はそれ相應の苦辛を嘗めた。唯だ此書の内容に至つては蓋し淡きこと水の如くであらう。

明治四十四年十一月

淀橋柏木に於て

著者

在佛國巴里　和田三造君
在英國倫敦　武内鶴之助君
在白耳義ガン市　太田喜次郎君
同　兒島虎次郎君

今度の旅行中、諸君には一方ならぬお世話になりまして、この本を書て行く間も、不絶諸君の事は、念頭を去りませんでした。で、紀念旁々御禮を兼て、謹でこの本を諸君にデヂケートすることに致します。

著者

目次

出發前の十五日……一
横濱出帆の一月十九日……七
愈々日本と御別れ……一〇
上海の二晝夜……一三
名殘惜しき上海を去る……一八
氣の許せぬ香港……二〇
香港新嘉坡間の船中……二五
新嘉坡と彼南……三〇

目次

コロンボ港の碇泊……三八
コロンボ、スエズ間の十二晝夜……五二
愈々本統の西洋……六一
五十日目でマルセーユ……六四
マルセーユの二週間……八〇
マルセーユよりリオン……八三
瑞西國ゼネーブ……九九
灰色の巴里……一〇七
巴里から倫敦……一二一

氣味の悪いエヂンバラ……一二七
又と來る氣の爲ぬダンヂー、グラスゴ……一三六
ウヰンゾルに來て蘇生の思ひ……一四二
白耳義へ出發……一四七
思ひ懸け無き獨逸見物……一六一
ドレスデン、アムステルダム間の瀛車……一六七
アムステルダムへの安着……一七五
睡つた樣なハーレム……一八一
ハーレムの雨景を後にヘーグへ……一八六

歐洲繪行脚

目次

夜が明けたやうなロッテルダム……一九〇
ミッドルブルグ、ヴエールの漁村……一九四
和蘭より再度白耳義に歸る……一九七
秋の巴里……二〇五
西班牙へ出發……二〇九
夜が明けきらぬマドリッド……二一三
全市裏店のトレド……二二三
再度トレドよりマドリッドへ……二三三
闘牛見物を濟せてマドリッド出發……二四〇

バルセロナ、マルセーユ間の十六時間……二四五
伊太利旅行の序幕——ゼノアとピサ……二四七
寒いフロレンス市……二五三
奈良のやうなシエナ……二六七
羅馬の滯在……二七五
湯ケ島に似たチヴオリ……二九〇
チヴオリよりネープルスへ……二九四
ネープルスを逃出してポムペイへ……二九七
車馬のないヴエニス……三〇六

歐洲紀行脚

三度目のマルセーユ……三一六
マルセーユ出帆……三一九
ポートサイドよりカイロ……三二〇
久米氏にカイロにて……三二五
サツカーラ見物……三三〇
ルクソールとアスアン……三三九
加茂丸乗船……三四七

目次終

挿畫目次

歐洲繪行脚

一安藝丸（網目版）……頁七
一支那ヂヤンク（セラチン版）……一四
一香港クキン街（同上）……二四
一東條鉦太郎君、茂木習古君、五姓田芳柳君及び著者（網目版）……二七
一甲板上にて書割揮毫（同上）……三二
一彼南港（セラチン版）……三三
一コロンボ港の郊外（同上）……四四
一カンデーの土人と象（網目版）……四八
一安藝丸船客（同上）……五四
一ポートサイド（セラチン版）……五八

歐洲繪行脚

一マルセーユの港(網目版二度刷)……六四
一パレー、ロンシャン(網目版)……六七
一美術館内の女畫家(同上)……六九
一マルセーユ舊港(同上)……七五
一リオン市ソーン河(セラチン版)……八五
一ゼネーブ湖畔(同上)……一〇〇
一ゼネーブの郊外(網目版二度刷)……一〇二
一巴里の町(同上)……一〇八
一自炊道具(網目版)……一一〇
一ヴヰル、ド、ブアレー、コロー石碑(同上)……一一三
一ブロニーの森(網目原色版)……一一六
一グラント、ジョーミール畫塾(網目版)……一一八

挿畫目次

一大隅爲造君、白瀧幾之助君、茂木習古君、和田三造君及び著者(網目版)……一二〇
一ウキンゾル附近の景(網目版二度刷)……同
一テームス河畔イートンの原(網目原色版)……一二二
一イートンの朝(網目版二度刷)……同
一倫敦橋(網目版)……一二三
一ハムプステッドにて撮影(同上)……一二四
一ハムプステッド、ヘース(同上)……同
一ハムプステッドのめし屋(セラチン版)……一二五
一竹内鶴之助君、高木誠一君及び著者(網目版)……一二六
一倫敦タワア、ブリッヂ(網目版二度刷)……同
一エヂンバラ附近の景(網目版)……一二八
一エヂンバラ郊外(セラチン版)……一三一

歐洲紀行脚

一悪戯小僧（セラチン版）……一三四
一ダンヂー（同上）……一三七
一グラスゴー（同上）……一三九
一ウキンゾル城（同上）……一四三
一ウキンゾル城遠望（網目版）……一四四
一イートン牧場（網目版二度刷）……一四六
一ガン市（網目版）……一五一
一ガン市の尼寺（セラチン版）……一五二
一ガン市の古き裏屋（網目原色版）……同
一同上（網目版）……一五四
一ガン市白壁の家（網目版二度刷）……同
一兒島君、太田君及び著書（網目版）……一五五

挿畫目次

一ガン市の郊外（同上）……一五六
一ブルーヂの婆さん（同上）……一五八
一ブルーヂ町（同上）……一五九
一ブルーヂの橋（網目原色版）……一六〇
一カイゼル、ブリードリッヒ美術館（網目版）……一六四
一ドレスデン市街（同上）……一六五
一ドレスデン郊外の牧場（同上）……一六八
一獨逸の田舍道（同上）……一七二
一夜が明けて四邊の光景が薄く見えて來た（同上）……一七三
一エメリッヒ附近（同上）……一七四
一アムステルダム附近（網目版二度刷）……一七六
一宿の引札（網目版）……一七七

一アムステルダムの町(網目版)……一七八
一アムステルダム(同上)……同
一雨のアムステルダム(同上)……一七九
一ハーレム人の寺詣で(同上)……一八一
一デルフト町の風車(同上)……一八二
一ハーレム(同上)……一八四
一和蘭の田舍の娘(同上)……一八六
一ニユー、エンダムの風車(網目版二度刷)……同
一田舍の少女(網目版)……一八七
一ロツテルダムの町(セラチン版)……一九〇
一ロツテルダムの船(網目版)……一九一
一ロツテルダム市中の風車(同上)……一九二

一ミツドルブルグ(セラチン版)……一九四
一ゼーランド、ヴエールの漁村(網目原色版)……同
一ヴエール村の寺(網目版)……一九五
一少女の盛裝(同上)……一九六
一アントワープ本寺(セラチン版)……一九八
一ブルーヂの宿の名刺(網目版)……二〇〇
一ブルーヂ町の魚市場(同上)……二〇二
一鐵道同盟罷工(同上)……二〇三
一セーヌ川の雨(同上)……二〇六
一ボアド、ブロンニユの寫生(同上)……二〇九
一マドリツド、プエルタ、デル、ソルの景(同上)……二一〇
一ヴエラスケス筆肖像(同上)……二一一

歐洲紀行脚

一トレドの町（網目版）……二二九
一トレドの水賣（同上）……二三〇
一トレド、アルカンタラ橋（セラチン版）……二三二
一ブラザ、トロースの入場切符（網目版）……二三八
一闘牛の圖（セラチン版）……二三九
一バルセロナ、コロンブス紀念像碑（同上）……二四四
一ゼノアの町（網目版）……二五〇
一フロレンス（網目版二度刷）……二五四
一フロレンス、アルノ河（網目版）……二五五
一フロレンスの裏町（同上）……二六〇
一アンジエロー作ダビッドの像（同上）……二六三
一フロレンス市滑稽なる日本劇（同上）……二六七

挿畫目次

一シエナの町、其一（同上）……二六九
一同、其二（同上）……二七二
一ロレンゼッチ筆肖像（同上）……二七三
一ソドマ筆肖像（同上）……二七四
一羅馬フオーラム、サターン殿堂の跡（網目版二度刷）……二七六
一ローマ宿屋前の眺望（セラチン版）……二七八
一サン、アンゼロー城とサン、ピエトル寺（網目版二度刷）……二八四
一フオーラム、ローマの全景（網目版）……二八六
一コロセオの内部（同上）……二八七
一チヴオリの瀑布（網目原色版）……二九〇
一チヴオリの山裾（網目版）……二九二
一ネープルスよりヴエスヴヰユスを望む（同上）……二九六

歐洲紀行

一ポムペイ附近の景(網目版)……二九八
一ポムペイ博物館(同上)……三〇一
一犬の屍體(同上)……三〇二
一カサ、デイ、ヴエッチの臺所(同上)……三〇三
一ヴエニスの全景(同上)……三〇九
一ヴエニス(同上)……三一〇
一ヴエニスの堀割(同上)……三一一
一ヴエニス市場(同上)……三一三
一グランド、カナル(同上)……三一五
一マルセーユの港(同上)……三二〇
一カイロ市マホメット、アリー回教寺院(同上)……三二四
一ギゼのピラミッド(セラチン版)……三二六

挿畫目次

一オウシの墓より掘出されし板の浮彫(網目版)……三二八
一ラムセス二世のミイラ(同上)……三二九
一女王タイの首(同上)……三三〇
一パッドルシエイン附近にて撮影の久米氏(同上)……三三二
一メンピスの遺跡附近にて撮影の著者(同上)……三三六
一カイロ亞剌比亞町(セラチン版)……三三七
一ナイル河(同上)……三三八
一カルナックの寺(同上)……三四一
一ルクソールの寺(同上)……三四二
一ナイル河の夕暮(網目版二度刷)……三四四
一瀬戸内海(網目版)……三四八

歐洲繪行脚

三宅克巳著

出發前の十五日

元來自分は何事によらず、思ひ立つと直に決行しなくては氣が濟まぬ厄介な癖がある。今度の歐洲旅行も矢張さうである。餘り突然で意外に思つた友人もあつたが、この奮發は自分にさへ聊か意外の感があつたから、他人の驚いたのは無理も無い。斯く決心して愈々出發の準備に取懸つたのが、十二月の初旬。準備と云ふた處で甚だ簡單な話で、別にこれと云ふて書き立てる程の事も無い。然しその仕度に就て聊か滑稽があつたから茲に記さう。

挿畫目次終

□自分は平素から奈何も洋服が嫌らいだ。洋服そのものが厭な譯では無いが、日本の樣な國柄で、洋服を着るぐらい、不自然で窮屈なことは無いと思ふ。第一日本では靴などよりも下駄の方が遙に便利だ。雨でも降れば東京廣しと雖も、靴で歩けるやうな道路は殆ど無いでは無いか。

□人はよく旅行は洋服に限ると云ふが、自分の考では旅行こそ愈々日本服に限ると思ふ。斯う云ふ考から、洋服は最早止めにしやうかとも思案したが、丁度出發の時は殆ど着用に足る服は一枚も無かつた。奈何しても新調せねばならぬ。そこで永持のする丈夫一方と云ふ注文で、黑無地メルトンの背廣を拵らへ、又冬の外套も無かつたので、茶色、地厚の羅紗で造つた。これは大阪で矢崎千代治君から君には立派過ぎるよと云はれた程の物であつた。兎に角これだけの晴着を身に着けて、山高帽を被つた自分は、七ツ下りのインヴアネスを着て、尻の擦減つた俎下駄をひきづつた平素の自分とは人品、百段も上つたさうである。處が此大得意の

晴着が片端から大滑稽のボンチ種であつたとは、マルセーユ上陸前迄、當人一向に御承知なかつた。是で洋行が三度目も何もあつたものでは無い。

□と云ふのは歐羅巴、殊に倫敦などではメルトン樣の無地の羅紗地は、婦人の服地で、決して男子の服に用ひないさうだ。成程マルセーユに上陸後氣を付けて見ると、自分の樣な羅紗地の服を着て居る者は、殆ど一人も見當らぬ。歐羅巴では男の服には皆綾が這入つて居る。更に滑稽なのは、唯服のみで無い。自分の外套も甚だ不思議だ。歐洲人の着て居る外套は、羅紗が無地の場合には必ず襟に天鵞絨が附いて居る。天鵞絨が附いて居なければ、切れ地は必ず縞に極つて居る。而から自分の樣な無地羅紗で襟に天鵞絨の無い外套は、喪服であるとのことである。これも注意して見廻した處まんざら嘘でも無いらしい。

□斯く樣子が知れて見れば、往來を歩くにも何と無く氣が咎めて、自分獨りが輕蔑されて居る樣な邪推が起る。斯る失策も歐羅巴に着く眞際に氣が付いたので

は既う遅い、と云ふて如何に滑稽でも、新調の一枚看板を直ぐに捨てゝ了ふて、彼の地で新調する程の勇氣は無い。どうく其服は翌年一月伊太利迄絶えず着通して了つた。併し道がの西洋にも變り者はあると見へてマドリッドに行つた時一人自分の仲間に出逢ふた。斯のようの具合で着物からが此始末であるから其他の物は推して知るべしである。

歐洲繪行脚

日本から歐洲に行くには通路が三つある。第一が西比利亞鐵道、第二が太平洋を渡つて米國經由、第三が印度洋經由である。一番長旅ではあるが、費用が安くて呑氣なのは、印度洋經由である。同じ印度洋經由でも、旅程日數の長いのと短のと、船賃の高いのと安いのがある。若し旅程日數を限らず、唯だ安くて氣樂と云ふ事ならば、日本郵船會社の船に便乘するに若くはない。此會社の船なれば、横濱出帆マルセーユ迄は、日本に居るも同然である。自分は無論此會社の船に乗る事にした。同社船の船賃は、一二等に限り往復切符二ヶ年有効、復航運賃五割引である。東

洋諸港の見物旁々呑氣な旅にはこれが一番の造り方であらう。

出發前の十五日

口彼是と仕度をする内、早や十二月も半過ぎて、世間は段々世話敷くなつて來た。印度洋紅海の暑氣は格別であるから冬の航海でも全く夏仕度が要る。十二月の寒い取付きに夏物の下着や服を揃へるのであるから却々骨が折れる。トロンクや鞄を買ふ。自分では隣に行く位に考へては居るが、さあ愈々出發となれば、又た存外に多事多端である。

口明治四十三年の新年は來た。その月の十九日愈々出發と確定した。船は六千四百餘噸の安藝丸である。安藝丸は聊か自分には縁故がある。と云ふものは明治三十六年、確かセント、ルイ萬國博覽會の前年であつたと思ふ。日本郵船會社の模範船として此博覽會に出品すべく安藝丸船體の繪を依頼されて、友人矢崎千代治君と一緒に船に寫生に行つたことがある。當時はこの安藝丸が會社唯一の新造模範船であつた。然し時代の進歩は恐ろしいもので、今では八千六百噸と云ふ賀

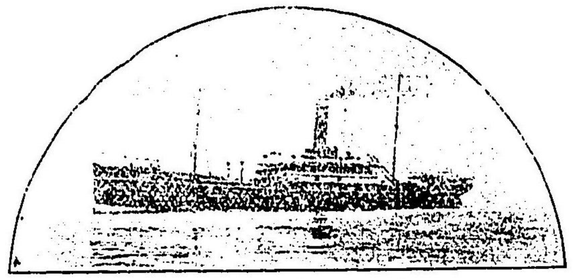
茂丸などが出來て來て、安藝丸は第二位に落ちて了つた。愈々切符を買ふて乘船客の名簿を見ると、實に意外のことには五姓田芳柳、茂木習古、東城鉦太郎君等の名が見える。

□成程諸君は日英博覽會に赴かれるのである。其他日本人の船客は殆ど滿員であつた。

歐洲　　倫敦　　行脚

□愈々明日出發と云ふ一月十八日の夜、我々の爲めに白馬會々員の催にかゝる送別會が開かれた。我々と云ふからには自分獨の送別會では無い。第一が倫敦に行かれる久米桂一郎氏、次が矢張倫敦に赴かれる菊地錦太郎君、巴里に留學される橋本邦助君及び斯く云ふ自分の爲であつた。會場は麴町山王臺の下、赤阪の八百勘と來て居るから申分は無い。會員殆ど總出で非常な盛會であつた。散會したのが夜の十一時過ぎ、自分はそれから歸つて、明日の仕度をやらねばならぬ。

横濱出帆の一月十九日



安藝丸

□横濱出帆の一月十九日。前夜から碌に寢る間もなかつたので、何となく茫然と眼がかすむで、世の中が何時もとは違つて見える。早朝から見送りのため態々來て呉れた友人等は、色々荷物萬端の世話をやいて既う何時でも立たれる用意が調つた。突然茂木習古君から今度同航となつたことを打驚かれた手紙が來て、若し神戸迄汽車で行くなら是非同行しやうと云ふことであつた。習古君とは今度七八年振りで過ふのである。

□正午十二時に横濱を解纜すると云ふので、午前十時頃の汽車で新橋を出立した。安藝丸は既う棧橋に横付けと

なつて居る。出帆旗は高く風に飜つて、煙突からは黑煙が墨の樣に立上つて勇ましい。自分は友人等に周圍を取り捲かれて意氣揚々と乘船した。此日は珍らしい暖い春の樣な日和。見送りの諸君には定めて御迷惑な事であつたらうが、送らるゝ自分に取つては此上も無い愉快であつた。特に五姓田芳柳、茂木習古、東城鉦太郎諸君と同船と云ふ偶然の出來事は、飛上る程嬉しく。

『ヤー君遲かつたねー待つて居たよ』

『奈何か船中宜敷』

給洲行脚

『よーこれは〳〵珍らしい所で御一緒に』なぞと、斯樣な挨拶が互に交換される。

口見送旁々出張の諸君も珍らしい船內の見物で、半分は氣が轉倒して彼方此方とまご〳〵する。中には塗りたてのペンキに觸れて、大切の晴着をメチャ〳〵に汚した氣の毒な方々もあつた。船は正午を合圖に棧橋を離れた。東城君は何かの都合で神戸迄汽車で行かれると云ふので一時下船された。晴亘つたその日の空

は、濃いコバルト色で、宛然小春日和。暖い日が海風と混つて、甲板に立つて居る我々を舐める樣に吹いて來る。右手に觀音崎の砲臺を眺め、左手には房州の鋸山を望みながら、相模灘に乘り出した時の氣持と來ては、實に何とも云へぬ、愉快であつた。

口船中自分と習古君とは、期せずして同室であつたから、互に寢ながら上と下で話が出來る。習古君は誰知らぬ者の無い、有名な健腕家であると同時に、畫筆に劣らぬ話上手である。此御蔭で、長航海の無聊を慰むる譯であるから、仕合は此上も無い。有名な遠州灘も先づ無事に過ぎて、翌廿日神戸港に着いた。此所には二晝夜碇泊する。早く日本の地を離れ度いと思ふが、却々さうは行かぬ。

口五姓田、茂木兩君と東京美術學校の關保之助君とは、奈何しても美術家氣質、古道具屋漁りと早速上陸せられた。自分は矢崎千代治君を訪ふ爲め大阪に行つた。尤もこれは船の着いた翌廿一日の早朝であつた。此日は生憎朝來の雨。大阪市は

宛も汁粉の様な悪道で、殆んど話にもならぬ。漸く矢崎君の宿なる大阪ホテルに尋ねついた時、雨益々激しく盆を覆すとでも云ふ様な降方。自分は矢崎君を誘ひ出して、對岸の牡蠣料理船に出懸けた。而して窓外の雨景を眺めながら、氏が曾て歐巡歐された時の話などを聞きつゝ、飲み且つ大いに喰つた。夕暮雨を侵して神戸に歸り再び狹苦しい船室にもぐり込んだ。

歐洲繪行脚　愈々日本こ御別れ

□瀬戸内海の風景は、評判程に面白く感じなかつた。唯湖水のような平坦な海上を靜に船の奔るのが、何よりの愉快であつた。門司港には石炭積込みの爲め一日碇泊して直に出帆した。こゝで愈々日本と御別れである。さう思ふと何となく名殘惜い様な氣も爲て、間違つても今一日碇泊して居て呉れゝばなどゝ、女々敷考が起つた。

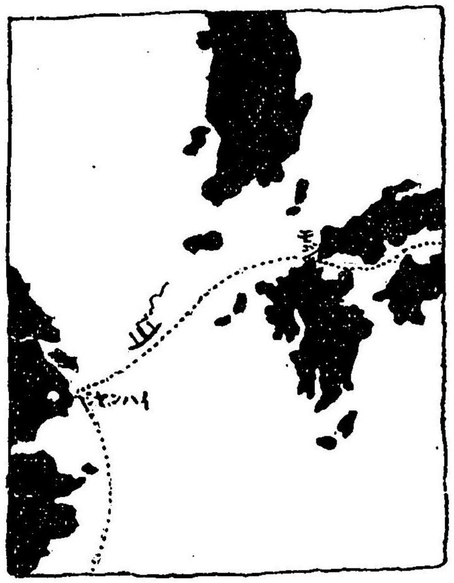
□門司碇泊中、嘗て慶應義塾バレット倶樂部員であつた秋葉君が突然現れて、自分を威かした。秋葉君は今日本郵船會社門司支店の在勤で、自分等の乘船して居ることを知つて、茲に待構へてゐられたのであつた。氏の話によると、二三日前藤島武二君が佛國よりの歸途、此所を通過されたと云ふことである。門司で秋葉君につかまつた畫家は、誰も紀念繪葉書を一枚揮毫させられることになつて居ると見へて、其後巴里で橋本邦助君に遇ふた時、橋本君も一枚約束して描いたと云ふ事を聞いた。自分は歐洲に着た後、瑞西から其所の寫生畫を一枚送つたと覺へて居る。

愈々日本こ御別れ

□玄海灘は豫期したよりは平穏であつたが、それでも自分に取つては非常の苦痛であつた。自分も一晝夜飲まず喰はず、船室に横臥して人と談話するさへ面倒に思ひ、唯時々正宗の瓶を傾けるのが多少の慰樂であつた。

□こゝで一寸斷りたいのは、茂木習古君の甚だ元氣な事で、三度の食事は殆ど缺

かされたこと無く、其陽氣なことも寧ろ呆れる許り、自分の室には習古君の外に、讀賣新聞記者藤原冷泉君も居られたが、如何に威張つた處で、自分等は到底習古君の元氣には及びも付か無かつた。



第一圖

習古君時々嘆じて云ふ、

『船が少しでも動き出すと、僕は實に情け無くなる。何處の室に行つても諸君が皆若い顔をして、何も云は無いので、其寂しいには何とも閉口します、エ、、、、』

と如何に何と冷笑されても致方が無い。默つて降參して居るより外に途は無い。關君と自分とは意氣地無しの兩

大關であつた。

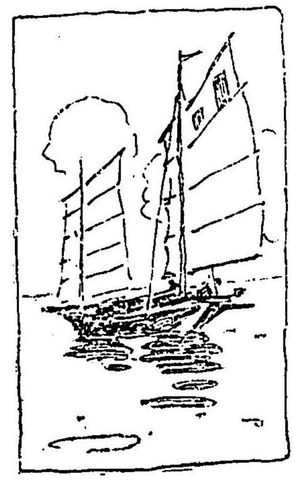
上海の二晝夜

上海の二晝夜

上口門司を出帆して二晝夜で上海に着いた。上海に着く其日の朝から海は渾濁して、船は味噌汁の中を奔つて居る樣である。これは云ふ迄も無く、揚子江の流が海に注ぐからである。今日は初て外國の地を歩むと云ふので、一同勇立つて未だ港の影も見へぬに各々めかし込み、我も〳〵と上陸の仕度を急いだ。

二晝夜

口その內船は全く進行を止めた。見ると上海とは奈何な立派な港かとの銘々の想像に反して、船は渺茫たる沼田の如き海の眞中に碇泊して居る。遙に望めば陸地らしき一帶の線が僅に見へるばかりである。此所に二晝夜空しく碇泊すると聞ては、一同呆然たらざるを得無い。暫くすると遙か港の方から、一艘の小蒸汽船が來た。聞けばこれは上海迄の通船であつて、自分等の乘つて居る本船は、上海港



支那ヂャンク

黄浦江の河口、十四浬の沖合に碇泊して居るとのことである。投錨の廿六日その小蒸汽船は本船より客を運べば、二昼夜の後で無ければ再び歸船が出來ぬと云ふので、一同上陸するや否やに就て迷つた。

□結局自分等の一行は上陸と決した。客を滿載した小蒸汽船は本船を離れて、約二時間の後、漸く上海港英租界税關の前に着いた。夢の様な氣持で海岸に上陸したが、海岸大通の光景は、到底日本の神戸、横濱等の比では無い。第一建ち並ぶ建築物が非常に大きい。電車、自働車、馬車、人力車の往來織るが如く、初めて此の光景に接した一行は、暫時開いた口も塞がらぬ有様であつた。

□此夜は東和洋行と云ふ日本人經營の旅館に、投宿することにした。この宿は昔て金玉均が刺客に暗殺された宿屋で、而も我々の通された西洋室が、やられた其

の部屋であるさうである。客室は何れも洋七和三の折衷で、日本内地の宿屋とは餘程其趣向が異つて居る。此所では日本婦人の給仕女が出て來る。牛鍋を皆でつつく。日本風の湯に這入る。一同の御機嫌殆ど絶頂に達した。

□夜は宿から案内者を連れて、最も繁華なる福州路に見物に行つた。町の兩側に上海は日本の藥種屋の看板地味た金看板が、一面に懸け連ねてある。喫茶店、料理屋が の檐を連ねて居る。路傍の檐端には、濃厚な化粧に顔を塗立てた支那美人が、頻に往 二 來の人々を呼留める。芝居では鉦を鳴らして、火事場の様な騒動をやつて居る。見 昔 るもの聞くもの一として眼新しからぬものは無い。余等一行は案内者の導くが 夜 儘に、金魚の糞の様に繋がつて、彼方此方と引廻された。

□兎に角上海の見物は、一行に尠からぬ新智識を、總の側の人に與へた。日本よりは餘程盛んな場所だと云ふことは、誰れの胸にもヒシ〳〵とこたへた。翌日も幸ひ晴天、早朝から宿を出て恐園、張園を見物に行つた。恐園では純粋な支那風の建

築と庭園に、何れもこれは〳〵と驚いた。そこで他日の紀念にと、一同庭園に列んで撮影した。五姓田、東城兩君は寫生道具を肩にして、市街の寫生に出られた。第一建築が面白い。構造と云ひ色彩と云ひ、日本では迚も見られぬ。又風俗も餘程變つて居る。兩君は彼方此方と圖題を捜すに忙しく、日中宿屋にも寸時も居られなかつた。自分は全く畫筆には手も觸れず、宿に籠城して美術新報への通信文を認めた。

歐洲漫行脚

□自分はこの日の夕、同室の藏原冷泉君と一緒に、大阪朝日新聞特派員法學士中島爲喜氏の招待を受け、上海では有名な日本料理店と云はれる、新六三亭に招かれて、大饗應に與つた。席上長崎藝妓が三四名來て、盛んに歌ひ且つ舞ふ。藝妓同志の話の内には、往々一向解らぬ日本語など混つて、一種異樣の感に打れた。その晩の御馳走で特に嬉しかつたのは、螺螺の壺燒、海鼠の酢漬、及び松茸に芹と鳥の寄鍋等で、毎日油つこい船の洋食に稍飽きた口には、最も嬉しく味はれた。

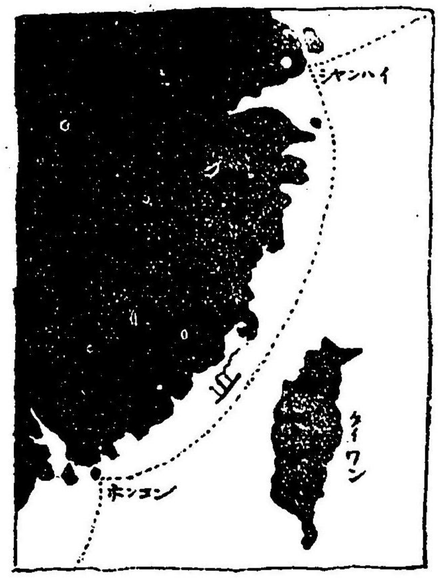
□二十八日の早朝、今日は愈々出帆と云ふので、一同東和洋行の宿を飛出して、再度市街を見物し、午前十一時波止場から又元の小蒸汽船に乘つて本船に歸つた。此日も晴天特に暖く非常な好天氣で、皆々何れも外套を脱いで、河風に吹かれなから丁度心地よい春の樣だと、銘々愉快さうであつた。で黄浦江を下りながら異

上海夜景

樣なヂャンクが、彼方此方を送迎遑なしと云ふ樣に往來するのが眺められた。勉の强家の五姓田君は、甲板の上から頻に寫生をして居られる。習古君と自分とは宿二屋から貰つた支那密柑を頻に喰ひながら駄法螺を吹く。その内船は漸く河口に豊出で、又渺茫たる泥海を奔り、漸く本船に着く。歸つて見れば何となく吾家にでも歸つた樣な心地がして、新しき快感を覺へた。同日午後一時船は出帆して香港に向ふ。一同甲板に出で遙に上海港の方を眺め、各々二日間の愉快を回想して名殘を惜むだ。

名殘惜しき上海を去る

□船が上海を出帆したのが、一月廿八日午後一時。これから三晝夜で香港に着くのであるが、途中に臺灣海峽と云ふ難所があるので、船に弱い自分等の心配は一通りで無い。船が上海を出帆して二から三四時間經つと、非常な濃霧が襲つて來て一間先も見えぬ。船は進行を緩めて、頻に汽笛を鳴らし始めた。乘つてる者は誰も餘り好い心地はしない。船員の云ふ處では海の危險は暴風でも無ければ、又激浪でも無く濃霧であつて、これ程恐るべきものは他に無いと云ふことである。



第二圖

□こんな話を聞くと一層心配が增す。斯くする內船の前方に、突然汽笛が聞こえ始めた。それが段々と接近して來る樣だ。何だか船の衝突ではないかと、稍不安の顏をして、船客一同甲板上に總出となつた。前方の汽笛が頻りに鳴るので、此方でも負けずに吹く。而も船體は聊も見えぬ。そのうち突然船の前方に一艘の小蒸汽船が現れた。これは愈々衝突かと手に汗を握つて見て居ると、其船から大聲に何か合圖をして居る。此方の船はその時全く進行を停めた。彼方の船からボートを下して我々の船に向つて漕いで來る。

□霧は小雨の樣に益々深く、波間に漂ふて來る狀が朦朧と影のやうに見える。我々の心配はこの時初めて晴れた。即ち前方に現れた小蒸汽船は、吾本船に乘込むで居つた、水先案內の降りる船で、濃霧の爲め互に汽笛の合圖で接近したことが解つた。その夕は尙ほ霧の裡を汽笛を鳴らしつゝ速力を緩めて進行した。然し霧は兎も角海上の平穩であつたのは、自分等に取つてはこの上も無い難有い譯で

あつた。

□翌日も矢張朝から霧で、前方は少しも見えず、絶えず汽笛を吹きながら進むだ。海上が平穏でも汽笛が絶えず鳴つてゝは、氣が落着かぬ。

□何所かに不安の念が付纏つて離れぬ船中でも、相變らず何時も呑氣極まる話で持切りであつた。上海上陸の際の旅館の珍談や、或は市街見物中の失敗談なぞ、皆銘々勝手な雑談が湧いて出た。習古君と自分とは同室であつたから、朝から晩迄負けず劣らず互に辯舌を闘はす。五姓田君と關君とはこれも同室で、又同趣味の人であつたから、終日故實の研究やら、甲冑の話等で夢中であつた。室を覗くと神戸か下之關の古道具屋で掘出した、兜の喉輪などを室内に飾込むで、至極得意の風であつた。

氣の許せぬ香港

□一月卅日。今日は香港に着く日と云ふので、一同は大喜びだ。早朝遥に夢のような青山を望み、正午終に香港に安着した。着船早々上陸した連中もあつたが、自分は上陸を止めて日本への手紙や通信を書いた。香港は流石に東洋一の港のことゝて、其盛況は遠く上海の上にある。着港の翌日五姓田、東城、關、茂木諸君と連れ立つて、市街を見物すべく上陸した。此所は上海に比べては一層市街が繁華で、建築は壯大、風景も亦可いので、一行の者誰として打驚かぬ者は無かつた。特に市街家屋が色々色彩に富んで居るので、到る處畫ならざるは無しと打悦んだが、如何せん此所は要塞地である爲め寫生は出來ず、此一點は甚だ殘念に思ふた。

□香港で見物すべき場所は、先づ御定りのピークだ。インクラインで此の山頂に登ることである。其距離約二哩。急勾配な丘陵の絶頂へ、鋼條を以て車體を昇降させるのであるから、實に乘つた氣持の愉快さ加減は、何とも譬へ樣が無い。山頂に登ると、港灣は宛然箱庭の如く見える。何にしても日本なれば寒い盛の一月卅一

日と云ふ季節に、美しい綠の樹木が茂つて居たり、種々の草花が咲いて居ることであるから、初めて見物する人々の眼には、珍らしいのは當然である。ピークから降りた停車場の附近に公園がある。入口には花崗石で造つた美しい廣い石段があるが、先づその石段を見たばかりで吃驚する。その石段の兩側には、紅や黃や白の草花が盛んに咲き亂れて居て、芝原は燃ゆるやうな綠色で四邊を一面に彩つて居る。何所を見ても、唯色彩の美麗なのには驚かざるを得ない。

歐洲繪行脚

□公園内には盛裝を凝らした西洋婦人、支那婦人なども散歩して居る。此女連が偶々噴水の邊などを逍遙して居る時は、其儘活きた繪である。往來は何處に行つて見ても、皆コンクリートで立派に固めてある。それが強い日光に照らされて眼もまばゆき樣である。偶々西洋人が多勢の支那人に擔がれて、籐椅子に乘つて澄して通る姿は、聊か滑稽に感せざるを得ない。市中に人力車の多いのは我國と違ふ處はないが、これは自國で見慣れて居る所爲でもあらうが、餘り氣が付かなか

つた。唯自働車と馬車の多いのには驚くの外無い。

□香港にも日本の旅館や料理店が多くあるが、何れも極めて不廉である。自分等は當港で名ある清風樓と云ふ旅館に上つて、日本の蕎麥を喰つた。蕎麥は天麩羅に鴨南蠻を命じた。これが香港第一等の日本蕎麥であらうが、東京なれば先づ板橋、千住、淀橋あたりの場末の頗る不味い田舍蕎麥であつた。こんなことなら喰はぬが優であつたと、如何に後悔しても追付かず、不平タラ〳〵其宿を出た。出際に更に驚いたのは喰つた蕎麥の値段で、天麩羅一杯三十七錢には、如何に豪膽な自分等も一時顏を見合せた。

氣の許せぬ香港

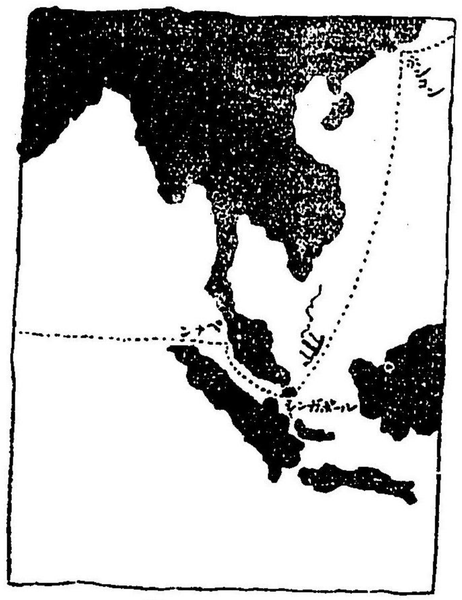
□香港で最も自分等の目を悅ばしたものは、支那町であつた。何れの町並も皆爪先上りで、宛然上州伊香保の樣な趣がある。檐先には例の大きな赤い灯燈を下げ、或は種々の看板を掛け連ね、而も路傍には日本の綠日然たる露店を張つて、其有樣何處を見ても立派な繪である。五姓田君等銘々寫生道具は携帶して居たが、終

に寫生することが出來ず、唯だ珍らしき風物を目擊して驚いたばかり。他、日出來得れば再擧を圖つて、是非寫生の爲め渡來したいと、畫家連中は異口同音に叫んだのであつた。歸船の時バナ、オレンヂなぞを買ふたが、これは又其廉なるのに驚かざるを得ない。バナ、なぞは本國での先づ一割の價で買へると思へば間違ひは無からう。

香港ノ街

口香港に上陸して最も注意を要することは、掏摸と贋錢をつかまされることである。郵便局で切手を買ふても、往々惡錢の釣錢が混つて來ることがある。現に同

船の一人は、贋金を釣錢に掴まされたと云ふので、支那人の郵便局員を敵手取つて、大に其不都合を詰責した。自分もポッケットに入れて置いた二本の萬年筆を、散歩して居る間にうまく掏摸取られた。



第三圖

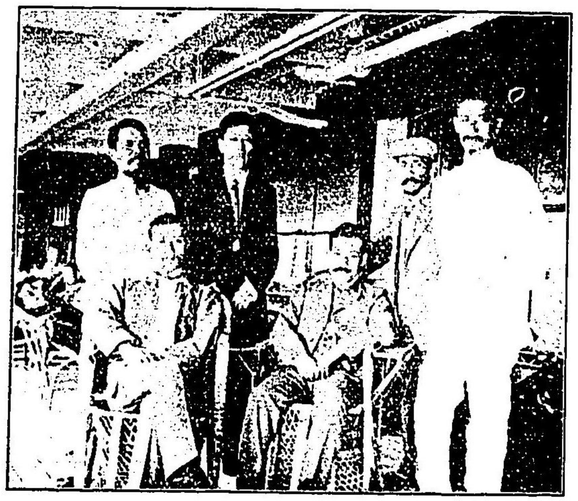
香港新嘉坡間の船中

口二月二日、午前六時、船は香港を出帆し、大島小嶼の間を縫つて新嘉坡に向つた。香港横濱間の距離三千四百三十海里。香港を出帆してから海波稍高く船は多少動搖した。併し、最早慣れた所爲か、甲板へ出て運動することが出來た。香港で一同籐の長椅子を購ふたが、これは印度洋を航海するに、是非共入用な品である。それに香港で買へば、日本で買ふ

半額で買へる。寫眞入の目錄を持つて注文を船に取りに來る支那商人が、幾人も押懸けて來る。それに誂へると、思ふ樣な品を直ぐに船に迄持つて來る。

□香港を出帆してから、暑氣は日增に加はる。禮儀正しいハイカラ連に無禮を謝して、そろ〳〵單衣を着る仲間が日毎に多くなつて來た。何と云ふても二等船客廿四人と云ふ日本人が、甲板に勢揃と云ふ姿であるから、少しも外國に出懸ける樣な氣持はしない。中には錢勘定も未だ解らぬ手合が、マルセーユ上陸以後巴里見物、さては倫敦遊覽も、矢張この調子で押通せるものと極め込むで太平樂を云ふお目出度い人もあつた。

□二月四日の朝、船長は特に自分等畫家連の爲め、甲板上で、撮影して呉れた。我が安藝丸の船長は本間久五郎氏として肥大の壯漢で、日本人の船長としては最も人望あり、又船客に對して極めて親切な人であつた。船室は日增に暑くなつて來る。テーブルに出る氷水や、又日曜日毎に出るアイスクリームが、何よりの御馳走となつて來た。日本ならば今は嚴冬、寒風吹いて、ストーブでも焚てふるへて居るべき時、汗を流してアイスクリームを喰ふなどゝは、實に案外であると騷ぎ立つて嬉しがる。



立ちて居る右より
東條鉦太郎君
茂木習古君
著者
五姓田芳柳君

□船の日々の御馳走は、誰れも次第に飽いて來た。先づ獻立を記して見ると、第一朝飯には、オートミール、ビフテキ、スクランブルエッグス、又はボイルド、エッグス、ライス、カレー。時にはハム、エッグスも出る。それで仕舞がコヒー、或は茶に菓子。ビフテッキは運が惡いと、雪駄の裏皮の樣な硬いのにぶつゝかる。これにぶつかつては、ナイフで細く切るのさへ容易なら

ぬ骨折を要する。習古君はオートミールを啜りながら

『船中で毎朝七草粥とはヲッデげす』と喜び、五姓田、關兩君はライスに梅干を注文して、それに味附海苔をふりかけて

『これは美味い諸君やり給へ』と頻りに珍重して居られた。故に自分等も此御馳走を試みた處、至極口に合ふ處から『ライス梅干』なる熟語が出來て、朝夕盛に注文が出た。

歐洲行即給

口次に壹飯の献立を擧げると恁うである。先づ最初にスープが出る。次がフライド、フィッシュ、チキン、シチユー。夫から冷肉にはロース、ビーフ、コン、ビーフ或は時にはベーコンやオックス、タングなどが出る時もある。又朝の肉の殘りを細かに、して、それに馬鈴薯などを混ぜて、妙な露西亞語を付けて、特別の御馳走らしく喰せる時もある。壹飯の終には必ず何かプッディングが出て、矢張茶かコヒーが付く。それから其場所々々で安く買へる菓實を添へる。

香港新嘉坡間の船中

口夕飯は朝と先づ大差は無い。尤もオート、ミールの代りに矢張スープが出る。三度の食事外に呉れる物は、毎早朝コヒーに燒パンが出て、午後三時に菓子に茶が出る。

口船中の食物は先づ大體がこんな風で、毎日殆ど同樣な献立、而も野菜の乏しかつたのは、何よりも閉口した。そこで誰の發議とも無く、徐々と日本食の請求が始まつた。香港を出帆してから三日目、即ち二月五日の夕に、一同の寢言に迄出た日本めしにあり付いた。日本なれば先づ日常の飯、敢て御馳走呼ばりをする程のものでも無いが、それが非常な饗應で、何れも皆舌打をして喜むだ。その時の膳部は、味噌汁と鯛の燒魚、烏賊と松笠の甘煮、それに漬物が澤庵と奈良漬。自分はその時の澤庵に茶漬の味は、今に忘れることが出來ぬ。

口二月六日、その日は横濱を出帆して、十八日目である。明日は愈々新嘉坡に着くのだと、誰も大に樂しみにして居た。この日一等に乘つて居る東城鉦太郎君の部

屋に集つて、船長から紀念にと依頼された畫帖へ銘々揮毫を試みた。東城君は上海で買ふた支那人形を描き。五姓田君は香港市街で目擊した、二人で擔ぐ籐椅子を寫し。茂木君は三等甲板にだらし無く寢そべつて居た三等客の男女の一團を揮毫し。自分は不得己安藝丸香港碇泊の狀を寫して、その責を逃れた。

新嘉坡と彼南

□二月七日、月曜日。無事新嘉坡着。暑氣益々加はり、宛も吾國六月下旬頃の樣な心地がした。而も當時は雨季の事とて、空は一面に曇り、一日に數回の驟雨來り、各所見物中傘は一時も離せなかつた。雨が過ぎれば空氣冷へて、大に涼しく、心地好きこと限り無く、到る所樂園の感を覺えた。

□自分等は着船の翌日上陸して、馬車を雇い博物館及び植物園等を見物に行く。植物園は海岸を離る約三哩許り。四人乘り一頭引の馬車賃二弗。五姓田、東城、關諸

君は海岸通り積田館(德丸旅館)に投宿して、翌日船に歸る。自分は茂木君と共に市街各所隈無く見物して、その日の夕歸船した。當港は矢張要塞地帶とて寫生寫眞等嚴禁である。されば迂濶にスケッチなど出來ず。博物館にはマレー人の武器、衣服其他珍らしき陳列品あり。植物園は東洋にても珍らしき有名なるものとて、有繁に其規模大なること、日本最負の關君も舌を捲かれたさうである。

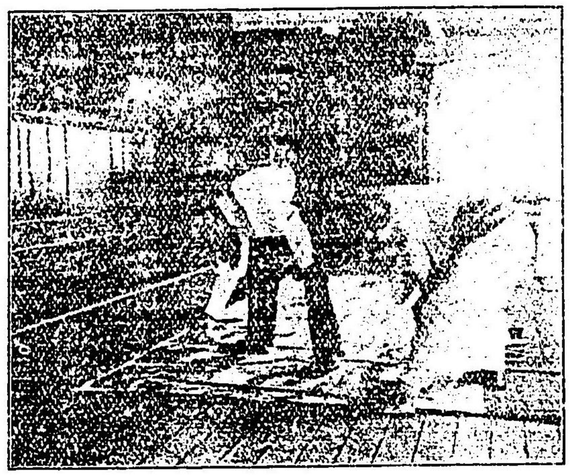
新嘉坡

□日本出發以來、場所毎に通貨の違つて居るのは、誠に煩しい。又土地によつて、それぞれ相場の違ふには、何時も閉口する。上海では日本貨幣の拾圓が、拾壹弗餘に兩換され、香港でも亦拾壹弗となる。これと變つて新嘉坡、彼南(ナン)のような海峽殖民地では、拾圓が僅に八弗五十仙となつて了ふ。僅の地を隔てゝ斯る相違を見るは實に不快千萬のことである。

彼南

□二月九日、午後四時、新嘉坡を出帆して彼南に向ふ。その翌日は船員の依頼を受けて廣い一等甲板で芝居の書割を描く。航海中芝居の書割は、聊か不思議の樣で

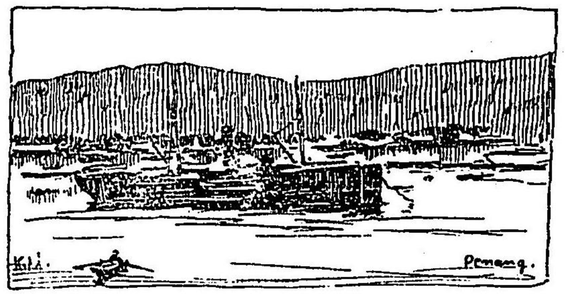
あるが、これは十一日紀元節の祝賀會の餘興の爲である。此安藝丸には他の船に類の無い役者が揃つて居る。引幕から各衣裳は云ふ迄も無く、鬘小道具の類迄驚くべく整頓して居る。背景は三間許の金巾地に、兩國百本杭の光景と、山崎街道、他に室内の一部を書いた。茂木、五姓田の兩君御得意の筆を揮ふと、畫は立所に出來上つた。東城君と自分とはホンの御手傳に畫筆を握つて、忙敷さうに彼方此方を唯まご〳〵したばかり。



甲板上にて書畫揮毫

□新嘉坡を出帆して二晝夜で彼南港に着いた。此所はマレー半島西部の要港である。これと云ふて特別に見物する所も無いが、此地の植物園と支那人の寺院とは、態々車を奔らす價値がある。市街はマレー人と支那

人の商店多く、香港に比べては云ふ迄も無いが、新嘉坡に比べても、稍々狹隘で不潔である。唯その異樣な風俗と、彼等家屋の構造及び生活狀態は、一々目新しき印象を與へる。この地にも日本人經營の旅館、商店があつて、日本風の米飯や茶位は飲み喰ひすることが出來る。



彼南港

□此港に就て特に書くべきことは、日本から遙々來て居る出稼の婦人である。出稼の婦人と云ふては其性質が甚だ曖昧で、極めて不得要領であるが、矢張そう云ふより外に言ひ方が無からう。此麼なことを書いて、神聖なる讀者諸君の眼を汚す罪は、自分でも重々承知はして居るが、此港を出帆する時、同胞たる彼の出稼婦人に就て、忘れられぬ深き印象を得たから、聊か茲に記さう。

□有名な新嘉坡には、幾多日本出稼婦人が驚くべき勢力で、巢を構へて居ること

は誰知らぬ者は無からうか。僅々四百海里離れた此土地にも、年々歳々出稼人の數を增しつゝあるは實に意外千萬な話では無いか。各地を通じて彼等出稼人の根性は同じである。其根性の說明に就ては今茲に書く迄も無いことながら、此ペナンに至つて全然その根性を異にして居るさうである。彼等は未だ正直ださうだ。日本の國土を戀しがるさうである。日本人と見れば眞意から尊敬を拂ふさうである。彼等出稼婦人の多くは九州の端、天草、島原邊の者多く、皆直輸入であるから、吾故郷の村とこのペナンより、他に世界は無いものに思つて居る。至極無邪氣なものである。此麼關係の爲めか奈何か、そこは知らぬが、兎に角ボーイ水夫其他の船員迄、此港に來て俄に模樣が變る。何所となくソワ付いて來る。此所が愈々日本の端ぢと云つて凋れて居る。碇泊の夜船內は一入寂しさが目に留る程人の影が消える。

□吾安藝丸は二月十三日、正午出帆と云ふので、昨夜影を隱した連中が、小さな通

船に乘つてボッ〳〵と歸つて來る。マレー人の船頭は、兩手に櫂を押して、透明な深綠の海を此方に漕いで來る。陸の方には强烈な色彩を呈して、市街の建物が濃きブルーの空を衝て居るのも見える。自分等は朝飯前、蒸暑き船房から逃がれて、新朝の冷へた空氣を吸つて居る。

□思はず遠く海の彼方を眺めると、小形の通船が二ッ三ッと此方を指して來る。嘉坡白衣の日本人が二三人乘つて居るのが能く解る。處がその船には日本人の男ばかりで無く、年若い日本美人も同船して居る。水色や、桃色や、其他のリボンが朝風と彼に飜つて居るの迄、段々鮮に見へて來た。此光景は自分等に意外の感を與へたが、南又直にそれと悟ることも出來た。

□そのリボンは即ち彼南に居る吾同胞の姉妹である。彼女等は客の朝歸りを態々船迄送つて來るのである。彼女等に取りては日の丸の旗飜る日本の船は、自分の國の樣な思がするさうである。自分等試みに『お早う』と聲を懸ける。彼女等も亦

丁寧に禮を返す。天草・島原邊の百姓娘とて、口を利かねば、立派な令嬢とも見ゆる上品な者も見受けた。

□彼女等は一々船中を見物して、容易に立去る氣色も無い。その內出帆も切迫することゝて、彼女等は不得己又元の通船に乘り、海岸指して歸つて行く。自分等は冗談半分帽を取り、或はハンケチを振る。彼女等も亦頻にハンケチを振り、一同聲を揃へて『船中御機嫌克う』と呼ぶ。船は段々本船より離れる。彼女等は一波毎に本船より遠くなる。而も『船中御機嫌克う』のその聲は段々に大きくなつて來る。遙に見え無くなる迄も彼女等は尙も頻にハンケチを高くふつて居た。本船は頓て動き始めて西を指して波を蹴つて奔り出した。彼南の市街は遠く薄く、終に遙か水平線上に僅にその山影を止むるのみとなつた。然し彼女等の噂は甲板上、暫時絕ゆる間が無かつた。

□彼南を出帆してから二月十四日の夕七時、豫て企の演藝會が催さ

吹洲

給船

行

聞

れた。一等甲板に舞臺を構へて、其所で芝居が始まると云ふ騷動。印度洋の新月は細く西に殘つて、波は物凄く船端をたゝいて居る。この夕集つた船客一等十五六名。御馳走には日本の鮨とサンドウキッチとが出た。自分はボーイ連の芝居を見新るより、久振りで鮨と茶を飲むだことが何よりも嬉しかつた。

嘉

□當夜是非共乘客側より何か一幕出して呉れろと依頼され、實は五姓田・東城・茂坡木・藤原諸君と自分五人を中心として、喜劇ハイカラと云ふのを演ずる筈であつと た處、不得己る事情で中止となつて了ふた。自分等その爲め四晩を稽古に費した彼る甲斐も無く、空しく沙汰止みとなつたのは返す〳〵も遺憾の次第である。その南夜又一の滑稽新聞が發刊となつたが、却々振つたもので、就中關保之助・五姓田芳柳兩君の洋行姿と云ふが出たが、罪無くして尤も眞を穿ちしものとて好評を極めた。

コロンボ港の碇泊

第四圖

口二月十七日早朝、コロンボ港に着いた。ダラ、ブンチエーと妙な唄を歌ふて來る裸體潜水小僧が來るであらうと、待ち構へて居つたが、一向其影も出さなかつた。後で聞くと近頃嚴しく禁せられたのださうだ。然し五月蠅く來る寶石商人は今も昔も少しも變らない。段々と其數が殖へる許りだ。彼等が根氣よく商賣するには、實に感服する。殊にハセームと云ふのは、信用ある商人だと云ふ日本旅客の證明した名刺を、數百枚持つて居て、一々こ

れを示して商賣をする。中に何々宮殿下が幾百圓御買ひ上げになつたとか、又何々大使が此男比較的正直者なりなど記載した名刺もあつた。何處の國でも商賣する方法は、少しも違はぬものと深く感服した。書伯連中も何れも皆多少の土產物を買ふた。

口大勢の客の內には、識らず知らず莫大な買物をして、後で少し靑くなつた連中もあつたと聞いた。兎に角最初は誰も欺されては大變と皆注意して、財布の紐を確と締め容易に油斷は爲ないが、粉め上手の彼等商人は『ミスター、ルックシー、ナイス、リング、ナイス、ストーン、ヂャッパンモネー、テンエン、ベリー安い、ノーテンプラ（日本人が鳴物と云ふので覺えた）ヂス十八金、ミセール、ベリー安い』と云ふ工合に、彼等一流の英語を使ふて攻擊して來る。尤もこれが彼等の商賣だから、如何に堅固な倭魂を持つてる者でも負けて仕舞ふ。中には怪しい日本語の間に、少し許りの英語を混ぜて、手眞似半分にやつて來る愛嬌者もある。

□偖て、斯うなると出發前『六十日英語卒業』位を嚙つた連中が、急に威勢が付いて來て、此方でも手眞似半分に『ハウマッチ』などと怖々に當つて見る。待構へて居た先方は、『オーライ、ミスター、カムオン、ヒヤー』とか何とかぬかして、人の居ぬ物蔭に態々招いて、古ぼけた先祖傳來と云ひたい樣な鞄を開ける中からは光輝燦爛たる寶石入の指輪や襟飾のピンなども出て來る。つかまつた先生は、指輪其物を見た喜びよりも『ハウマッチ』と一言やつた其結果が、此處までに漕ぎ付けたものだと云ふ其嬉しさが、ムラ〳〵と頭に昇つて來て、一時に大英語通にでもなつた氣がして、一ポンドや二ポンドは愚か、四ポンド五ポンドでも、決して惜しくない樣な氣持になる。

□更に怖々『イットイスデーヤ、テンシールング』と兩手を擴げて見せるずると商人はさも驚いたと云ふ風を見せて『ノー、〻』と一度は首をふつて逃げる眞似をするが、直に又やつて來て『オーライ、ミスター』とか何とか甘いことを云ふて、巧に

商賣をやる。其時には肝心賣人の商人よりも、寧ろ買人の先生が喜んで、愈々得意の絶頂に達す。それは生れて初めて英語で買物が出來たのであるから嬉しいに違い無い。

□又其味が忘れられず、止めれば可いのに又他の商人に同じ手で當つて見る。終に又も石を買はせられる。玉を押附けられる、斯んな工合で三四十回は瞬く間にバット散つて仕舞ふ。イヤ僕のこそ本統のルビーだとか、サフハヤーだとか、互に皆自分の買ふたのが一番の掘出し物の如く、銘々自惚れて浮かれて居る。然し何の道碇泊中の退屈凌ぎ、至極罪がなくて好い事だが、僅に二晝夜の道樂としては、餘り安い道樂とは云へぬ譯である。斯く可笑しく感じた自分も、幸に今度は、一文も手を出さずに濟むだが、曾ては矢張コロンボー通過稅とも云ふべき、安からぬ指輪の一個を買ふた覺の無い、でも無い。

□コロンボ港で觀覽する場所は、ビクトリヤ、パークと博物館、それと郊外にある

寺院である。馬車は四人乘で一時間二ルピー（一ルピー我六十錢餘）人力車は一時間が半ルピー。併し人力車は容易に齊らない。徒に時間許り取つて賃銀を貪る風習がある から決して氣は許せぬ。博物館には印度古代の佛像、彫刻、什器その他土人の使用した器具などが多く、一々趣味深く、シンガポールのそれに比べて、餘程この方が面白いと思つた。自分は波止場で兩替をやつて居る間に、五姓田、東城、關諸君の一行と別れた。

□五姓田君は濃縞の縮のシャツに、モーニング、コートを着けて、鳥打帽を被り、例の寫生用の雜具袋を肩に掛け、關君は白の縮のシャツに、鼠色のフランネルの單物。上に細い三尺帶をチョンと結んで、其樣子の簡單な事、一寸近所の湯にでも行つて來ると云ふ趣向である。自分は兎角ハイカラ勝に傾く他の連中の間に、斯う迄思ひ切つた兩君のあるのを、寧ろ縞に氣强く思ふた。此處でも香港シンガポールと同樣、餘り見馴れない異樣な風采に、土人は甚だ不思議さうに眺めて居た。

□自分は人力車を雇ふて、博物館に行つた。波止場から一里餘りで、ビクトリヤ公園に行かれる。途中日光直射して堪え難い程の酷暑を感じた。車上湖水を處々に認めた。湖畔に椰子の樹など繁茂して、其下に白衣を着た土人などが靜かに立て居る。恰も基督一代記の挿繪にでもありさうな圖だと思つた。又或場所で水牛と土人と共に湖水に浸つて、涼を取つて居る模樣など、何う見ても地理書の挿繪より他思へない。自分は獨り車の上から左右を眺めて、一々其奇景に驚きながら行く內に、何時しか博物館に着き、馬車で來た一等船客を始め、船長の一行に遇ふた。その內五姓田、關兩君も他の日英博覽會行の連中と共に車を連ねて來た。

□關君は特に深く興味を持たれ、一々丁寧に熟覽された。併し他の博覽會連中は、何れも餘り多くの感興がなかつたと見えて、ホンの素通りに車を奔らせて、更に郊外に在ると云ふ寺院を見物に向つた。自分は最初から自由行動を取れる事として、一行には更に頓着せず、緩々と見物を終り、博物館を出て試にその寺院といふ

のを見物しやうと、車を其方向に急がせた。

□車は椰子、檳榔子、芭蕉等の繁つてゐる田舍道を奔つた。行く事吾半里位で、一向まだ寺院に近づいたらしい模樣はない。其上人家も次第に遠ざかつて、處々に眞つ黑な裸體の土人の群に過ふばかりである。車夫は頻りに彼等と何か話しながら、自分の方をふり返りふりかへり、ニヤ〳〵笑ふ。自分も實は聊か氣味が惡くなつた。そこで車夫に寺院までの道のりをきくと、尙ほまだ三哩もあらうとの返答、それも極めて曖昧である。

コロンボ港の郊外

□此時自分は、われ知らずこれはこれはと驚いた。此上不案内の田舍道に引き込まれては、何んな目に過ふとも致し方が無いと、今は寺院見物所の算段では無く、

直ぐに車夫に命じて、車を後に返させやうとした。併し車夫は容易に承知せず愈々奔り出す。

□道は愈々森林に這入つて、名も知らず、又見た事もない奇草怪樹が殷々と深く茂つてゐる。此時自分は最早堪らず持つてゐたステッキで、車の蹴込を叩きながら、後に返せ〳〵と大聲擧げで呼ばはつた。併し不相變車夫は何か印度語で、頻に苦情を云ひながら應じないで、やつとの事車を元の道にかへした。兎も角も、自分は是で稍安心した。

□細徑を奔ること尙ほ半時間ばかりで、大道に出た。自分は思はずホッと息をついた。見ればランバラビテヤ街と云つて、印度洋沿岸に添ふてゐる國道で、此道を北に奔れば自然とコロンボー市街に達するのである。自分は全くそれで安心した。ランバラビテヤ街を過ぎれば、コロビテヤ街に出で、遙に市街の敎會堂の高い屋根などが、椰子の林の上に現れて見える。

□此日の夕會社のランチは、五時半波止場出帆が最終である。自分はどうか其時までに間に合ふやうにと大いに焦心したが、其甲斐あつて、無事に定時刻本船に歸る事が出來た。果せる哉寺院に行つた一行は、未だ容易に歸つて來ない。夜に入つて漸く來たものゝ、一向につまらなくつて、徒らに車夫に多くの賃金を貪られたのを愚痴つて居た中に東城、關の兩君は、特に困難をされて後で甲板上の笑話となつた。

□聞けば同君等は一行が博物館を立ち去つて、車を寺院の方に奔らせた後も、尙悠長と見物に餘念なかつたのであつたさうな。やがて、不斗氣付いて館内を見渡すと、案内の人は勿論、一同の影も見え無い。關君先づ驚いて、館外に出でて見ると、東城君が一人彼方の方で、車夫と何か頻に懸合中である。關君大聲擧げて、東城君を呼び、漸く此處に連を得て、更に手眞似身振で波止場に車をやる樣に命じた。車夫はなるべく時間を費して、賃銀を貪らうと云ふ下心から虫の匂ふ樣に少しも

奔らず、兩君非常に車上で氣を揉まれたと云ふ事である。

□言語不通の彼等印度土人、如何んとも懸合ひ樣がなく、唯車夫の爲るが儘に、車上に其運命を任して漸く波止場近くに來て、例の日本人華客の寶石商ハセームの店頭に來た。此處で漸く我に返つて、いきなり店に飛び込む。ハセームは有繋に日本人相手の商人、特に今度は兩氏とも大切の御客樣として下にも置かず、僅かに知る日本語の片語混りで應對した。兩君はハセームの勞によつて、先づ無恙本船迄歸つたと云ふ始末である。

□何れにしても當地は餘り人氣の好い方では無い。物價も著しく高い。それに滑稽な事は、下等の車夫迄が佛敎信者である事を大いに誇りとして居る。己は佛敎信者なる故に萬事正直なりと、自分の腕をまくり、胸に二體の佛像の指紋のあるのを示して、自己の正直な事を說明する。併し始めだけ證明して仕舞にうんと貪つては何にもならない。少しも油斷の出來ないのは何國の人間も同樣である。

□二晝夜の碇泊中、五姓田、東城、茂木の三君は、一等客と共に、一日カンデー見物に出懸けた。カンデーとは釋尊布敎の根據地で、人口四萬。コロンボーを去る七十二哩、汽車で約四時間で達するのである。市の中央に神聖地と唱へてゐる湖水があつて、今以て一般の島民から神聖に保護されて居る。此湖は、古代島王の浴水場で、湖の中央部に一つの小樹林がある。嘗て英國の侵略に遇つた時、島王竊かに逃れて此島に在つたが、終に捕はれて、斬首されたと云ふ話である。其他湖畔に圖書館、釋迦堂などがある。此處には釋迦の齒を祀つて年に一回信徒に限り縱覽を許すと云ふ。

カンデーの土人と梟

□本堂は千五百年以上を經た古代の印度塗をもつて、盛飾されてゐるので、他處では容易に觀る事の出來ない建築である。其他島中第一の高山だと云ふアダムス、ピークは、海面を抜く實に八千餘呎で、此山には釋迦の脚骨を祭つてあると云ふ。兎に角是非一度は見に行く價値がある。途中風景は日本の甲州或は碓氷邊を一緒に纏めた樣な絶景で、汽車は其間を奔るのである。

□朝六時コロンボーを發車して、晝食はカンデーのホテルでしたゝめ、午後二時カンデー發で夕の六時頃コロンボーにかへられる。案内料、汽車賃、食事萬事を合せて、一人前が一ポンド位である。併し日歸りでは到底見物をするのでは無くて、只何の事はない驅け抜けて覗きに行く位なものだ。結局吾國の日光日歸り見物の樣なものである。

□二月十九日。コロンボー港を出帆した。出帆の一時間許り前、五姓田君が頻に自分を呼ぶ。何事だらうと行つて見ると、一人の印度人を相手に談判最中である。一

方は英語。一方は日本語。これでは何時迄たつても埒があかないのは尤な譯である。五姓田君曰く、僕は此印度人の穿いてゐる革の靴を是非買つて貰ひたい。寶石や指輪よりも僕は此方が買ひ度ひのだから、奈何か君一ッ談判して是非讓つて呉れる樣に話して呉れ給へとの依頼。自分は、不取敢、其旨を印度人に告げた。併し印度人は承知して呉れぬ。さうして尙ほ云ふには『今これを賣る譯には行きませんから、町に行つて買つて來て上げませう』と云ふ。併し最早出帆の間際故、若し差支が無ければ相應の價は拂ふから、何とか聞いてはくれまいかと重ねて懇合つて見る。けれども矢張其甲斐がない。終に、それではロンドンの御住居を知らせて置いて下さい。さうすれば間違なく後から御送りするから金を御出しなさいと云ふ事になつた。五姓田君これには愈々閉口して『いや君是非これを賣る樣に話して呉れ給へ』と宛で子供の樣にだゞを捏ねて、却々聞かない。終に四シルリングで其古靴を買ふやうに相談したが、頑として容易に應じやうも無い。

□此印度人は船に積む荷の運送屋の番頭ださうで、餘程當惑の樣子も見えた。一方五姓田君は益々熱心にせき込んで、日本語で熱心に彼に迫る。彼の男は、終に一等のスモーキング、ルームに逃げ込んだ。さうして仕舞に今一シルリング奮發する由を告げた。すると彼印度人漸く裸足となつて、五シルリングと交換することゝなつた。思ふに最初彼が甲板上で拒んだのは、一ッは部下の人足共に對しての外見も幾分かあつたのであらう。それから五姓田君は其古靴を大事さうに抱へて、誇顏に自分の室に歸つて來た。靴の裏底には馬糞と、コロンボー市街の煉瓦の樣な赤土が、一面に附着してゐる。船員や例の博覽會行の連中などは、其古靴を高價で買ふた同君の心事を解する者は一人も無かつた。

□コロンボー港を出帆して、スエズ、ポートサイドに着くには、十二三日を要する。此間には又奈何な事が起るか。

コロンボ、スエス間の十二晝夜

□横濱を出帆して、コロンボ港迄の間は、長くて五六晝夜目には寄港するから、そんなに退屈も爲ないが、コロンボからスエズ間は十二晝夜を要するので、隨分退屈な譯である。船客同士の互の蕩氣話は鼻に付いて、面白くなくなる。持つて來た書物は大概讀み盡くして了ふ。其癖眞面目な書物は頭腦の所爲で、精讀する根氣がない。併し奈何な智者でもこれ計りは、未だ工夫が附かぬものと見えて、何人も無聊に

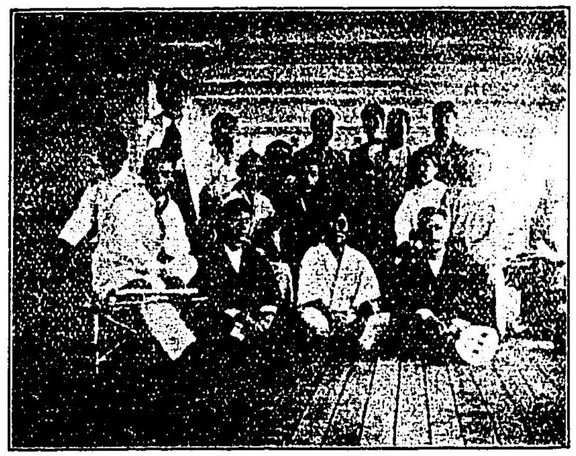
第五圖

苦しむのである。

□冬期の印度洋は概して波穩かに、船は少しも動搖せぬから、船客一同上機嫌で、宛も夏期海岸の宿屋に避暑して居る樣な有樣である。彼處の隅では、輪投げをやつて居る。此方の方では、骨牌を闘してゐる。圍碁をやる人、象棋を試むる者、又デッキ、ビリヤードに夢中の連中、銘々各自の得意な遊戯を始める。

□又中には讀書に飽きて、籐椅子に餘念なく眠つて居る人があるかと思ふと、其人の鼻や耳に紙縷を突き込んで、頻に惡戯をやつて居る者もある。兎に角鼻の下に立派な八字髭をはやした大の男が、子供にでもなつた氣で、無心に遊び戯れてゐるのだから、航海中の船の甲板上は全く別世界である。時には愛嬌澤山の船長殿が、寫眞器を持つて來て、客の撮影をやつて呉れる。又或時は上等客の方から使者を差し立てゝ、何か手紙を持つて來る。何にかと開封して見れば、考物の難題が認めてある。一人が夢中になつて考へる。漸く其解答が出來て、其返事を差送ると

同時に、新問題を此方からも提出する。又その返事の此方へ來ぬうちに更に新問題を彼方へ益々盛んに送る。少し返事の來るのが遲いと閉口したのであらうと、既う勝つた氣になつて、安心してゐると、偖て來たは來たは、此方から送つた問題の外に更に六ヶ敷難題が封筒にはみ出る程返つて來る。負けぬ氣の連中は、自分の遊戯はなげ出しにして、皆其方に總係りとなる。こんな事で一日を夢中に暮して仕舞ふ時もある。



安藝丸船客

□丁度コロンボーを出帆してから六日目であつた。又例の船中の團々珍聞が發行となつた。出たの出ぬのと云ふて、却々奇拔な記事や繪が出た。何時誰れが探訪するのか、何時の間にかすつぱ抜かれて、其紙上に現はれる。出された者は怒る譯には行かぬ。されば云ふて、餘り氣持の好いものでも無い。併し今更致方も無いから、讀んで笑ふ人々と共に、出された當人も一緒に笑つて仕舞ふ。誠に罪のない話である。

□或時、其新聞の挿繪に、英國產バナヽと馬鈴薯と云ふのが出た。英國產の馬鈴薯は解つてゐるが、バナヽは少し可笑しい。併し譯を話すと成程と合點がゆく。今其繪の說明を簡單に試みると、先づ次の樣な次第である。五姓田、關兩君のゐる船室に、まだうら若い英國人が混じつてゐた。丁度其臥床（ベッド）は五姓田君の下である。下床は、同じ寢臺でも暗くて暑い事夥しい。夫で、ペナン港を出帆して未だ二日目位だ、暑氣は中々激しい。室內に寢て居ては、中々行儀よく毛布などを被つて居る譯には行かぬ。で例の英人も每晚の樣に、毛布を悉皆踏み脫いで、臍から下は殆ど全くの開放主義で、吾不關焉を極めこんで居る。一夜此姿を五姓田君が發見して、竊かに自分等の室に態々知らせに來られた。すると習古君はこれに起されて、睡眠を

擦りながら、拔足さし足、カーテンの隙間から其室を差覗きにゆく。

□室内は電燈燦然き迄に輝いて、昼よりも明るいのだから堪らない。所謂其馬鈴薯とバナヽが一目瞭然である。そこで習古氏の睡眠も此光景にバッチリとして急にスケッチブックと鉛筆を吾室に取りに行き、さうして直くに其スケッチを始めた。スケッチは無事に成功した。其後其室を八百屋の店と呼び、毎夜其開店を覗きにゆくものが多くなつた。斯く云ふ自分も幸に其陪觀を忝ふしたる一人であつた。

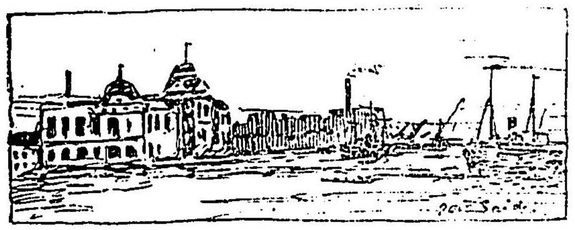
□八百屋の店は其後數日で閉店となつたが、一時は却々の盛況で繪にも描けず、文字にも成らぬ程であつた。先づ斯んな事で數日は知らぬ内に經過して、六日目の朝、左舷に亞弗利加の東端ガタフキー岬を見た。水と空のみに飽き〳〵してゐる自分は、宛然ら港にでも近寄つた樣な喜びであつた。望遠鏡を出して眺めながら、獅子か此方を向ひて吠ゑて居るとか、土人が爭鬪を試みてゐるとか、勝手な熱を

吹いて、何時になく大陽氣である。

□此處を通過して一晝夜半で、愈々紅海に這入る。紅海は有名な炎暑甚しい處で、誰れも、彼れも、來ない先から其酷暑は恐れて居た。中には早手廻はしの人々がポートサイド着港の時、差し出す繪葉書へ『紅海の暑氣何とも堪え難く、血も湧くが如く覺え候』などゝ書き入れて置いた人もあつた。自分も先年の經驗から、奈何に暑いだらうかと豫期して居た。處が不思議にも今度の紅海の氣候は、全く豫期に反して人を馬鹿にした樣な涼しさ。是では豫て自分が吹いて居た大法螺も一向に振はず、寧ろ面目ないやうな譯であつた。

□と云ふのはアデン港を右舷に見て、先づ紅海に這入ると、涼風は印度洋よりもまだ涼しくて、常に北風が通して夕方などは聊か單衣一枚では涼しすぎる樣であつた。船員も今迄に恁んな不思議な事はないと首を傾げて居たが、事實一日も汗など流した事は無く、紅海とは全く思へぬ程であつた。斯んな間違は間違つて

も難有い間違である。而も海上は吾瀬戸内海の樣に、殆ど自分等のやうな船の弱い連中も宛で船が動かぬ樣な氣持がした。涼しいのより何より船の動かぬのが心から嬉しかつた。



ポートサイド

口左樣斯樣して居る內に、待ちに待つた十二日は經過して、終に三月二日の午後七時無事スエス港に着いた。此處で乘船客や、船員の檢疫があつて、船は直ちにスエスの運河に這入つた。運河の中程で夜が明けた。北風は矢張盛んに吹いて。聊か寒さを感じた。運河は八年前に通つた時より稍々廣くなり、兩側は石垣となつて、大いに整頓して來た。

口船客諸君は、誰れも部屋に居る者は無い。皆甲板に出て、兩側の異樣な風光に見惚れてゐる。駱駝に乘つた、アラビヤ人が、果しもない砂漠をば、遙の方に旅して居るのが見える。又一本の樹木すら無い、

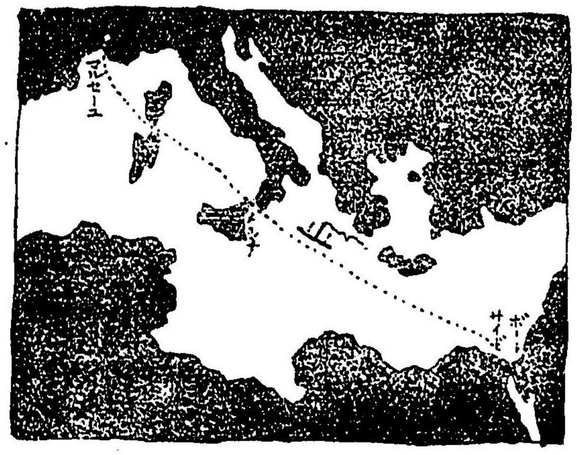
砂地に、土人の村落らしいものを認めるばかりである。其處には無數の山羊の群が、驚く程澤山野飼になつて居る。堀割通過の光景を一々詳細に記したら際限無いから此位に省いて置くが、船はスエスを出帆して、十五六時間でポートサイドに着いた。ポートサイドは石炭を積む處だ。而かも其石炭が粉炭であるから船に居ては堪ら無い。船室の窓は皆閉めて一々紙で目張をする。若し他の船の風下にでもならうものなら、石炭の粉で眞つ黑になつて了ふ。

口自分等は着船するや直ぐに、上陸して見物旁々散歩する。市街は砂漠の樣な砂地へ開いたのであるから、何處に行つても、宛も江の島か片瀬邊を歩いて居る樣だ。併し往來には石を敷きつめて、鐵道馬車などが通つてゐる。市街の樣子は佛蘭西風で、カツフエなどが至る處に店を張つてゐる。此處は有名な人氣の惡い土地で、町を歩いて居ても直ぐに無宿の立ん坊と云つた樣な土人が來て、市街を案內しやうと、うるさく附纏ふ。

□何處に案内するのかと聞くと、ヤレ裸體踊もあるとか、又面白い寫眞は入らぬかとか、甚だ怪しからぬ場所への案内である。勿論こんな地でこんなものでも見なければ、他に見るものは無いであらう。それと兩側に繪葉書店の多いのに驚く。又其繪葉書店に隨分思ひ切つたのが澤山あるのにも驚かれる。だから初めて來た人は、先づ此處でギャフンと參つて仕舞ふ。併し立派な雜貨商店も澤山ある。就中日本の品を賣つてゐる店は盛大に商賣をしてゐる。

□自分等は他の地では一寸飲まれぬ強いカッフェを飲み、大通りの模樣を見ながら時間を潰して船に歸つた。自分には用は無いが、煙草店の多いのにも驚く。煙草好の連中は、爭つて買ひ込む。聞けば、吾國で六七圓も價する埃及が僅かに一圓五十錢許りで買へると云ふ。中には斯んな煙草を無暗に吸ひ慣れて、日本に歸つたら嘸困るだらうなどと、嘆じて居た人もあつた。當港の煙草店に一人の日本人が雇はれてゐる。日本の船が着くと、直ぐに船に來て、煙草の商賣をする。又萬事買

物などの案内も面倒見て呉れる。ポートサイドに碇泊する事五時間。船は愈々これから地中海に乘り出すのである。



第六圖

愈々本統の西洋

□ポートサイドを出帆したのが、三月三日の夜の八時頃。偖て今度こそ泣いても笑つても愈々本統の西洋だと云ふので、乘船客一般の氣合ひが全く違つて來る。寄合ふと直ぐに着船後の相談が始まる。誰の心にも幾分か不安の念が起ると見える。中にはマルセーユ着港が何んだか嫁入前の娘心の様だと云ふた者があつたが、是は好く穿つた言葉だ。嬉しいのは山々であるが、さ

て又其裡に何か怖しい樣な氣もする。船が地中海に這入つてから、氣候は著しく寒くなつた。日當り好い風蔭に日向ぼつこをしてゐると、實に何とも云へぬ好い心持で、コロムボー邊の暑かつた事は、眞に夢の樣である。今迄はめつたに遇はなかつた船にのべつ暮なしに出遇ふ。

ロボードサイド出帆後五日目の宵の四時頃、シヽリー島のメンナ海峽を通過した。右舷にはイルミネーションを眺める樣に、レヂオの町の夜景が見える。全く燈の色までが、急に違ふ樣に思はれる。最早此邊は伊太利だなと思ふと、身體がぞく〳〵する程嬉しい。皆夜風の寒いのも厭はずに甲板に出て、頻に得意がつて居る。中には自分の領地でゝもある樣に、頻りに土地の地理や歴史を說明してゐる物知り漢もあつた。

ロメシナ海峽を過ぎて翌日サルジニヤとコルシカ間のボニフワチオ海峽を通過する。地圖を見るサルジニヤは、江の島程の大きさより無と思つたに引換へ、一

時間十二三海里も奔つて、それで終日島を離れる事が出來ぬ。コルシカ島の高山には、雪が一面に積つて、物凄い光景を呈して居る。五姓田君は、新たな風物の見へる毎に、態々自分等の室に報告に來られた。畵家連の手からはスケッチブックが一刻も離れず、眼に映る物は、皆其裡に納められた。

ロ三月八日。明朝は愈々マルセーユと云ふので、誰れもぢつとしては居られぬ。不精者の僕でさへ五十錢と云ふ大金を奮發して、理髮をした。トロンクから皺だらけのフロックを取り出して、窃に着て見るものもある。コスメチックを有るか無いかの髭にこすり付けて、頻りに化粧だす手合もある。理髮屋の大繁昌と風呂場の大混雜とは實に凄然たるものであつた。

ロマルセーユ着港前日の天氣は、一層好く快晴で、風は少しもなく、海は眞に盤のように平穩で、殆ど船の上に居るとは思へぬ。此日の夕飯は、御別れの宴と云ふので、酒こそ出さぬが特別の饗應があつて、一同樂しいテーブルに着いた。マルセー

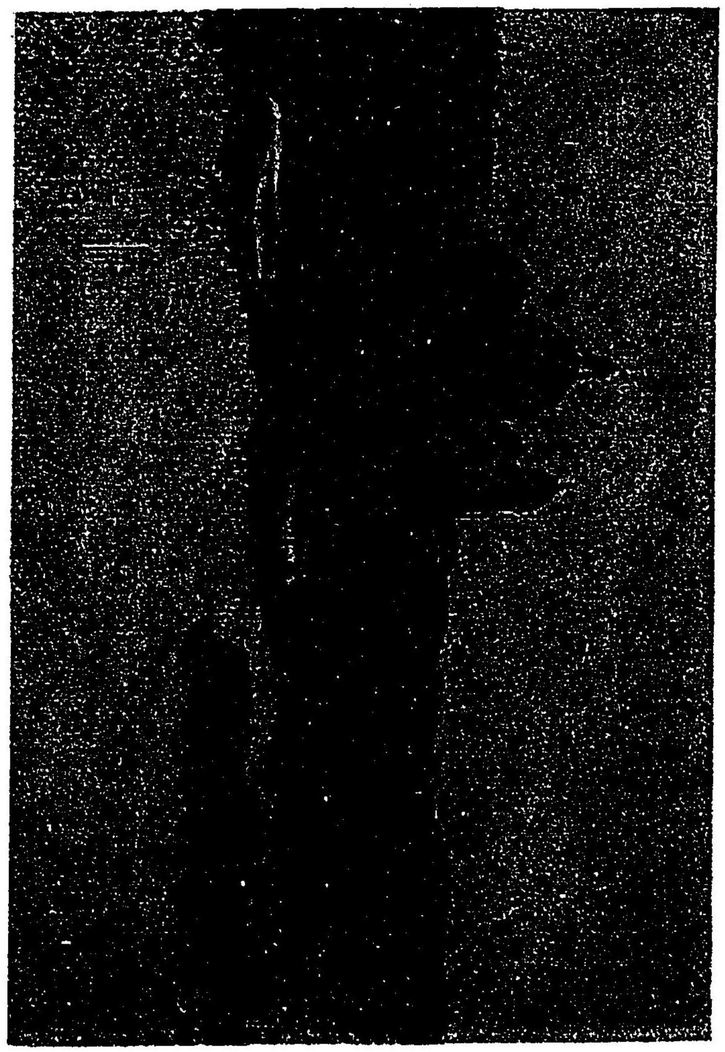
ユ上陸の客人は其夜碌に寢たものは恐らく無かつたであらう。

五十日目でマルセーユ

歐洲給行脚

□愈々マルセーユに着いたのが、三月九日の午前七時横濱を出發してから丁度五十日目である。此地に上陸して巴里、倫敦、乃至伯林方面に行く人は、尙更のことであるが、船で倫敦に行く人でも、最早目的地に安着した樣な氣がする。兎に角今迄は、何れも未だ東洋であるから同じ外國でも物足らぬ感があるが、偖て當地は立派な佛蘭西の港であるから、全く着いてからの氣持が違ふ。第一上海からポートサイド間、都合六箇所寄港するが、何處も船は野天に碇泊して、未だ本統の港と云ふものゝ工合が解らぬが、此地に來て初めて眞の港と云ふ意味が解る。

□六千噸以上の吾安藝丸が城壁の樣な防波堤の中に這入る。實て驚いたコロムボーの防波堤などは、此港に來ては何でもない。それに船が棧橋に着いて一際氣



佛國マルセーユの港

の付くのは、人足共の喧噪な聲がない代りに、荷物や荷揚機械の音が非常に喧ましく聞える事である。

□船が全く棧橋に着いて檢疫の終つたのが、九日午前八時。形式のみの檢疫が終つて、イザこれで可いとなると、宿引やトーマスクックの案内者や、其他世話人が盛んに這入つて來て、マルセーユ御上陸のお客さんは私が御案内を致します。御荷物は、私にどうぞ、と云ふ樣な事を云ひながら、宿屋や又はマルセーユの地圖入の案内書を持つて來て頻に世話を燒く。此時、誰も是等の案内者に依頼して仕舞ふのが尤も便利である。他の倫敦行の連中は、其日の夕八時十分發の列車で直ぐに出發すると云ふので、皆それ〴〵クック社に依頼した樣だ。

□自分は餘り客を引受けなかつたコックス社に荷物萬事を依頼して、直ちに船を去つた。税關は小さな手鞄を開けたゞけで、トランクなど僅かに繩を解いたのみで、宜敷と通過してしまつた。初めて渡來の連中は容易に船を去り難い樣に、長

々と船員や倫敦行の同船客に挨拶をして居た。余はコックスの示した宿に荷物の送達を依頼して、ステッキ一本を携へて、茂木君と同道で、直ちに棧橋を越へて先づ町へと出た。

口棧橋の出口に煙草やパンなどを賣つてゐる女が、立派な佛蘭西人であるから、それで既う一種妙な感に撲たれる。ポートサイド以東諸港の樣な支那人や黑ん坊は此處では一人も見ぬ。亞細亞人は唯自分等計りであるから往來を歩くにも何となく極りが惡い樣である。未だ早朝の九時(佛蘭西では早朝ならん)で職工や勤め人や女工などが、織る樣に往來を歩いて居る。物賣商人が箱車を曳いて、頻に呼び歩いて居る。往來の家屋は、何れも六七階の高さであるから驚かざるを得ない。八年前には極めて僅であつた電車が、今日では四通八達と云ふ工合で、何れに乘つて何處に行かれるのか少しも解らぬ。

口自分等は先づバレー、ロンシャンの美術館に行かうと、極めて怪しい佛蘭西語

で、巡査に乘るべき電車を聞いた。巡査は不相變親切に敎へて呉れた。自分等は其御蔭で無事に美術館の前に下りた。先づ其建築の壯大なのに眼を廻さゞるを得ぬ。茂木君も、唯啞然として更に言葉なしと云ふ風であつた。

バレーロンシャン

口石の階段を昇つて、左方にある建物が繪畫館。先づ這入つて直ぐに眼に入るのが左右の兩壁にあるピウビス、ド、シャヴアンヌの壁畫である。それより三室ある中央の室は、フレミッシュ派及びスペイン派の古い處がある。嘗て書物や

人の話で聞いた許りのルーベンスとか、リベラなどの繪が、現在眼の前に懸つて居るのだから、我々畫家に取つては夢の樣な感がする。右手の部屋の重な繪は、最も新らしい人の繪で、マルセーユに居て、マルセーユを題題にした作などが多い。左手の室にも、サロンに出品となつた新作もあるが此處には多く十九世紀の佛蘭西大家連の製作が眼に留まる。日本で最も一般に名の響いてゐるミレー、コロー、クウルベー、ドー、ビニー、ドロクロワ、デアス等即ちバルビゾン派の諸大家の肉筆が拜まれる。

□畫の陳列室は僅かに此三室で、これを巴里のルーヴル美術館等と比較しては、其數から云ふても殆ど一分にも足らぬが、日本から新來の畫家には、一々難有涙の出る傑作のみである。茂木君の敬服された事一通りではなかつた。

□館内には畫架を立てゝ、熱心に畫の摸寫に餘念のない女畫家があつた。壁に懸つて居る古畫の色合と、其婦人の着て居る上着やスカートの色合、好く色の調和

を保つて、それが既に活きた立派な繪であると習古君は、中央のソフヤーへ腰を下して、見惚れて居る。繪畫室の下が一面に彫刻室である。當地に來て殊に驚くのは、彫刻の技術である。電車に乘りながらブウルヴアー、ロンシャンの通りを來る

美術館内の女畫家

間にも、一二箇所噴水の臺になつて居る見事な彫刻に既に舌を捲いたが、此美術館に來ては一層其感が強い。巴里の墓地の表門に構へてあるバルトロメの原作などもあつて、夫れが大作だけに誰の目にも止まる。

□自分等二人は、三時間を此美術館内に費した。時計を見れば既に十二時である。自分等は今朝は、未だ朝飯も碌々咽喉に通らなかつたので、稍々空腹を感じて來た。それに未だ自分の宿屋にも行つて見ないので、殘り惜しい其美術館を出て、ブ

ウルヴアーをボツ〳〵歩いた。薄紅の日光は穏やかに照つて、敷石の上にコバルト色の影を印してゐる。氣候は眠くなるやうに暖かい。二人は何とも云へぬ得意さで、宿屋を指して歩を運んだ。自分の宿は、ステーションに近いオテル、ボルド、エ、ドリエント。と云ふ宿である。自分はコックス社の案内者に、最も安い宿屋を案内して呉れるやうにと頼んだら、此宿は、一日部屋代三フランと云ふ事で、先づ不取敢極めたのであつた。

□自分は茂木氏と一緒に此宿に這入つて、自分の荷物が來て居るか否やを尋ねた。すると直ぐに宿の娘が出て來て『ハイ來て居ります。部屋は何處がよろしいでせう』と云ひながら、此方へとリフトに案内した。自分等は其内に這入ると、三階に捲き上げられて、上等の部屋に導かれた。さうして一夜七フランだと驚かされた。そこで自分は尤も安い部屋が欲しいのだと懸合つた處、漸く一夜四フランの部屋に案内してくれた。部屋は至極狹くほんの寢室に過ぎない。しかし自分には是

で澤山だが、四フランはまだ少し高い。聞けば此部屋が一番安いのだと云ふ。最早其上の懸合ひ樣がない。自分は一夜だけ不得已此部屋に居る事にした。茂木君も其夜は同じ宿の四フランの部屋に泊ることにした。飯は壹が三フランで、夕飯三フラン半だと云ふ。自分等には到底お話にならないから、唯部屋だけを借りる事にして、他に飯を食ひにゆく事にした。

□自分等は其處で各自の部屋を極め、直ぐに宿を出た。さうして豫て見當を付けて置いた安飯屋のありさうなリユー、デ、レコレートと云ふ町に行つて見た。果して余が想像に違はぬ飯屋が幾軒もあつた。

□偶然にレストウラント、ヂユリエンと云ふ家に飛び込んだ。此處は巴里で申さば、バンテオン附近と云つた樣な、餘り上等の場所とも見受けられぬ。併し貧乏書生の自分等には、何の氣が措けなくて、至極呑氣である。乃ち先づ壹飯を命じた。此處では英語と獨逸、伊太利語が自由に通る。自分等は先づスープ即ち佛蘭西語で

所謂ボターヂュを初め、魚にビフテキに、野菜に果實などを喫した、何を喰ふても
も其美味な事は、舌打をする樣である。第一にパンの味から違ふ。
□スープは大きな鉢に一杯這入つて來て、二人で吸ひ切れない程の分量がある。
魚は鰯のフライで、それにレモンの汁をかけて喰ふ味などは、何と云ふて可いか
解らぬ。其上日本では容易に得られぬ葡萄酒が、水の樣に付いて居る。茂木君は日
本出發以來、こんな美味い料理は喰つたことがないと、一方ならぬ恐悦であつた。
續いて血のたれるやうなビフテキと、揚げたてのポテトーをウンと詰め込んで、
それで勘定が一人前たつた一フランと三十文。二人で二十文をガルソンにやつ
て、上等のお客樣で大歡迎をされるのである。何も物事はやり樣で奈何でもなる
ものではないか。自分は此宿が氣に入つたので、部屋を借りたいと談判して、明日
から借りる事に約束をした。而も此宿の部屋の方が前の宿の部屋よりは遙かに
廣い。

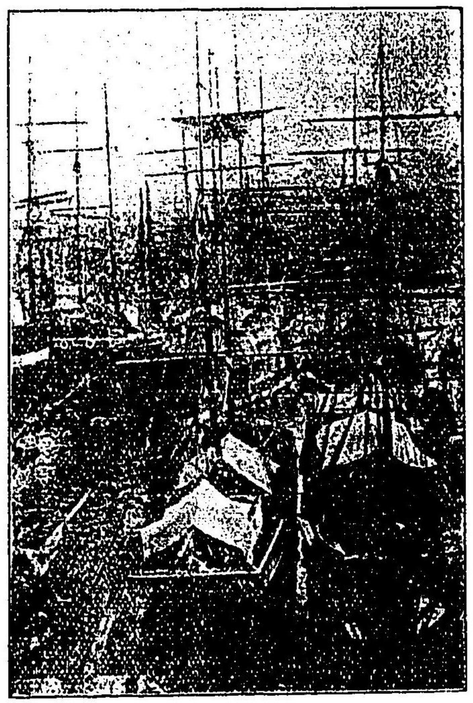
□實は自分に取つては、二フランの此部屋でもまだ聊か分に過ぎる感があつた
が、暫時の滯在であるから其處は我慢をして、此處に陣取る事にした。
□昼飯を終つて、二人は眞つ赤な顔をして、ノートルダームを見物する積りで其
宿を出た。午後になつては、ブウルヴァーの賑ひは一層に增して、迚も汪洋には歩
いて居られぬ。電車は織る樣に前後左右へ奔り、自働車はラッパを鳴らして、眼が
覺める樣な光景である。彼方の四辻には新聞賣の小僧が聲を絞りあげて、頻に客
を待つてゐる。花賣の少女が林檎の樣な顏をして、澤山の花束を兩手にかゝへて、
立つて居る。滿艦飾の美人が如何な急用でも起こつたかの樣に人込の間を駈け
拔けて行く。自分等は其混雜の市街の中央に佇立して、暫時茫然と此光景に見惚
れてゐた。
□二人がマルセーユの市街を見物した模樣は、餘り興味もないから茲には略す。
唯だ舊港へ、伊太利や西班牙邊からの汽船や、帆船の幅湊してゐる光景は、茲に記

す價があると思ふ。元來マルセーユの港は長さ二哩もある防波堤が、城壁の樣にドックを取り圍んで、其中に一萬噸以上の船も自由に繫ぐ事が出來ると云ふ仕掛であるから、船が愈々棧橋に横附けになつたとなると港だか何だか野天の港ばかりを通過して來た吾々には異樣な感がする。

□獨逸行の某學士は嘆じて曰く、歐羅巴の港だから香港、新嘉坡以上に風景も美麗かと思ふに引換へ、これでは何の眺望もなく實に失望だと、嘆息してゐた。防波堤上は勿論汽車が通れる。何にしろ二千萬圓も費けたと云ふのだから、日本では一寸想像が附かぬ。一度町に出て船に歸らうとしても、何處が自分のドックだか容易に解らぬ。現に、船員でさへ夜遲く歸船する途中で迷ひに迷ふて、夜明け迄歩いたと云ふ話もある。

□偖今云ふた自分の面白いと思つた舊港といふのは、此ドックから東方にあるので、規模は甚だ小さい。東京の越中島乃至永代橋邊の面影がある。船底を赤く塗

つたり綠に染めたり或は又眞白なのもある。兎に角種々樣々の色彩をした異樣の船が、馬蹄形の港にビッシリ碇泊をして居るのだから何とも云へぬ。

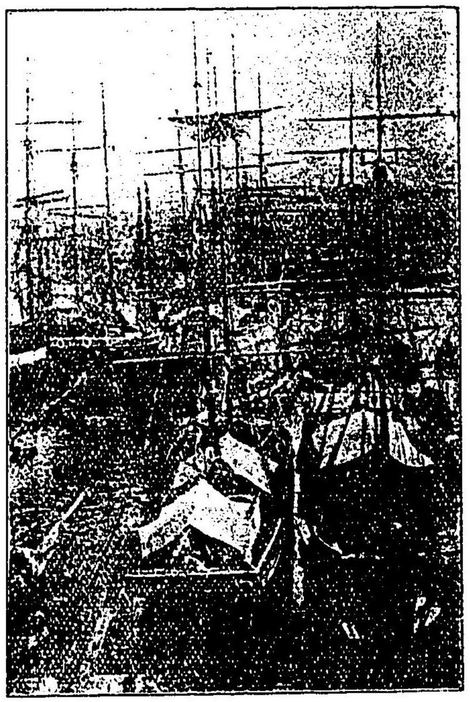


マルセーユ舊港

□空を衝くノートルダムの塔は、其林の樣なマストの間から、薄紅色の霧に包まれて、幽に見える。茶色や紺色の天鵞絨のヅボンを穿いて、サボー(木靴)を突掛けた船頭や、人足や又漁夫共が、大量の態度で歩いてゐる。船の舷尾には近くはツウロン、ニイス、セット、ボルト、ヴンドル少し離れてコルシカのアジャッチオ、伊太利のゼノア、ネエプルスでシナ、西の方からは、西班牙のバルセロナ、マラガ邊の地名が船名と共に、各中とは

す價があると思ふ。元來マルセーユの港は長さ二哩もある防波堤が、城壁の樣に
ドックを取り圍んで、其中に一萬噸以上の船も自由に繫ぐ事が出來ると云ふ仕
掛であるから、船が愈々棧橋に横附けになつたとなると港だか何だか野天の港
ばかりを通過して來た吾々には異樣な感がする。
口獨逸行の某學士は嘆じて曰く、歐羅巴の港だから香港、新嘉坡以上に風景も美
麗かと思ふに引換へ、これでは何の眺望もなく實に失望だと、嘆息してゐた。防波
堤上は勿論汽車が通れる。何にしろ二千萬圓も懸けたと云ふのだから、日本では
一寸想像が附かぬ。一度町に出て船に歸らうとしても、何處が自分のドックだか
容易に解らぬ。現に、船員でさへ夜遲く歸船する途中で迷ひに迷ふて、夜明け迄歩
いたと云ふ話もある。
口偖今云ふた自分の面白いと思つた舊港といふのは、此ドックから東方にある
ので、規模は甚だ小さい。東京の越中島乃至永代橋邊の面影がある。船底を赤く塗

つたり綠に染めたり或は又眞白なのもある。兎に角種々樣々の色彩をした異樣
の船が、馬蹄形の港にビッシリ碇泊をして居るのだから何とも云へぬ。



マルセーユ舊港

口空を衝くノートルダムの塔は、其林の樣なマストの間から、薄紅色の霧に包まれて、幽に見える。茶色や紺色の天鵞絨のヅボンを穿いて、サボー（木靴）を突掛けた船頭や、人足や又漁夫共が、大量の態度で歩いてゐる。船の舷尾には近くはツウロン、ニイス、セット、ボルト、ヴンドル少し離れてコルシカのアジャッチオ、伊太利のゼノア、ネエプルス、シナ、西の方からは、西班牙のバルセロナ、マラガ邊の地名が船名と共に、各

字で記されてある。

□概して汽船は尠い。皆千噸以上の三本マストの帆船であるから堪らない。跡！の巣を張つた樣な檣には、幾十人と云ふ水夫が帆架に昇つて、綱渡りをしながらそれ〳〵の仕事をしてゐる。ピンク色の朝日に照らされて、眞つ白な帆が一杯日に乾されてある。其間から各船の信號旗と共に、各國の國旗がチラ〳〵と見える。甲板では手風琴を彈いて愉快さうに歌つてゐる。彼方からは盲人の老爺が、孫に手を引かれてバイオリンを彈きながら錢を貰つて歩いてゐる。其又バイオリンの音調が耳を持たぬ吾々にさへ、如何にも耳を澄して佇立させる樣な一種の魔力を持つてゐる。又魚屋の主婦さんは、大きな魚籠を頭にのせて大聲あげて彼方此方の船の端を賣り歩いてゐる。

□向河岸の時計臺では、古風な鐘の音を出して、時を報じてゐる。雜沓極まる其中で優長な人足共が、三四人集合して悠々とトランプをやつてゐる。或は又バンを

嚙りながら、葡萄酒をあふつて居る者もある。消魂ましい音をさせて、荷車が波止場の敷石の上を駈ける。其間を自轉車が縫ふ樣に往來する。一口に云つて仕舞へば、有聲有色の活動寫眞である。又時ならぬ時に何所からか、突然ヂャポンニー。アナタ〳〵と呼び懸ける女の聲がする。ふりむくと下等な怪しい女である。此方でも不意の事で、聊か狼狽てゝ居る間に、アナタ〳〵とありたけの愛嬌を顏に浮べて、頻に手招きをする。此麼な處で日本語を耳にするとは、實に意外の感が起るが、能く考へて見れば、それも當然だ。二週間目に二艘宛の日本船が必ず入港するのだから、其他詳しく書き立れば限りがないが、此趣味ある複雜な光景は到底巴里倫敦では見る事は出來ぬ。

□自分等は其日活動寫眞に這入つたり、又夜はオペラに行つて見た。無論歌や饒舌る文句は少しも解らぬが、其大仕懸な事と幾十人の美人が舞臺一面になつて歌ふたり躍つたりするのだが、夢の中にゐる樣な心地がして、到底此世の中とは

思へぬ程の鮮麗なものであつた。十二時に打出して、宿に歸つたのが彼是零時半、愈々歐羅巴での最初の一夜を茲に過すのである。茂木君と余の部屋とは一間を距てた小さな室。それでも電氣燈も附いて居れば、スチームも備はつてゐる。

口先づ其夜は無事に寢たが、翌朝聊か珍談があつたからそれを記さうと云ふのは僕の部屋の隣に、男女二人の客が投宿してゐた。それが奈何して解るかと云へば、戸の外に細い女の靴と、大きな野郎の靴と二ッ列べてあるから直に解る。それで最早夜の一時過ぎ、イザ寢やうとする時も尙ほ隣室では話聲が聞こえる。僕は、電燈を消して寢た。すると隣の燈火が一點僕の部屋の天井に射し込む。これは不思議と調べて見ると、僕と隣室との境にある戸の上部に、小さな穴が開いてゐる。自分はハハアと合點して傍の椅子に伸びあがつて、試に其穴から失敬だが隣室を覗いて見た。すると其視線は朝の洗面器の方へ落ちた。誰がやつた仕事だか隨分の惡戲をやつたものだ。それで其夜は濟んだが、翌朝起きてからが觀物だと、注

意してゐるうちに、隣の男女も床を離れたと見えて、洗面所でゴト〳〵音がする。そこで例の穴から覗いて見た。今丁度女が兩肌を脱いで、何も知らずに顏を洗つて居るのが明白に見える。

口女の前には大きな鏡があるから、前後左右自由に窺ふ事が出來る。僕は直ぐに茂木君の室に行き、靜に同君を招いて、其小穴からそれを覗かせた。同君は一生懸命に椅子の上から伸び上がつて覗いてゐる。段々奥の手に進んで居ると見える。替つて僕が覗いた時は、スカートもはづして、薄き下着一つになつて、身體を拭いてゐた。如何に佛蘭西でも只でこんな觀世物はめつたにぶつかるものではない。茂木君は思ひがけない朝來の覗き眼鏡で、恐悅至極の態である。

口併し斯く書きたてると、誰れしも一寸其穴を覗きたくなるやうな氣がするかも知れぬが、正直に白狀すると、自分等聊か失望したのであつた。自分等に覗かれた其美人は、昔は兎に角、今は既う五十以上の老婆で、頭髮も殆んど胡麻鹽、肌も皺

だらけの餘り感じの可くない代物であつた。

□三月十日僕は茂木君を船迄送つて、終に別れ、僕一人になつて了ふた。廿四人と云ふ大勢の日本人の裡に、五十日間朝夕を共にして居たのに引き換へて、急に一人マルセーユに殘つたのだから、聊か異樣な感を免れない。

マルセーユの二週間

□其後自分はマルセーユに約二週間滯在した。偖て宿の亭主は英語を話すといふものゝ、奈何してもマルセーユからは、萬事佛蘭西語でなければ通用せぬ。佛蘭西語に就て何の準備のない自分の二三日の困難は一方ならぬものであつた。奈何しても急に佛語の研究をする必要が迫つて、終にトーマス、クック社にゆき、何か旅行者に適當な會話書はないかと尋ねた。すると果して非常な好い本があつた。

□それは Dr.J.T.Loth の著 The Tourist's Conversational Guide in English, French, German, Italian. で價が一法五十。自分が刻下必要の會話が親切に列んでゐる。僕は此書を手に入れたので、如何にか心强くなつたか、當時の嬉しさは今に忘れる事が出來ぬ。とは云ふものゝ、發音が一向に分らぬ。さうかと云つて忙敷い宿屋の亭主をつかまへて習ふ譯にも行かぬ。そこで一策を案じた。毎日スケッチに出懸けて、自分の傍に立つて繪を見る人をつかまへて聞く事に極めた。そこで內心恐々 Comment prononcez-vous ce mot? とやつて見る。誰れも喜んで敎へて呉れる。毎日中々の進歩だ。一生懸命の場合とは云ひながら、自分でも其進歩に驚いた。或時は小學校の學生が二三人來た。そこでコンモン、プロノンセーを試みる。大悅びで敎へて呉れる。發音が中々六ヶ敷い。奈何しても出ない。仕舞にはスケッチ處の算段ではない。

□畫架はそつちのけで、語學の敎場となつて了ふ。大聲で、アーと云ふから此方で

も大きな口を開いてアーと云ふ。ゴウと云ふからゴと云ふと、ノーンと否定される。ゴウ、コムサー、ゴウと直される。又シュと云ふから、やつて見る。一度や二度では卒業が出來ぬ。漸くア、ゴウシュ、右、と云ふ語を覺え、それに續てア、ドロソーと云ふ左と云ふ語を覺えると云ふ始末、中々一通りの骨折ではない。

□恁樣な有樣で漸く十語許りの仕入れが終ると、日は西方に傾いて、灰色の霧が高いマルセーユの市街を包んで、夕の寺の鐘が幽に響く。綠の草原の彼方からは、首に鈴を附けた羊が群をなして此方に來る。實に是は何とも堪らぬ可い心地だ。と思つた事が何度あつたか知れぬ。

□先づ以上の樣な有樣で、二週間の佛蘭西語研究は、僕をして、宿屋やステーションの懸合位には間に合ふ樣になさしめたさて片言が通じだして來ると、妙に早く他の場所に行つて見たくなる。それと一つは、リオン市のサロンを早く見たひと思つたからでもある。そこで三月廿二日マルセーユを立つた。

□宿の下男は、小さな車を持つて來て、僕のトロンクや鞄を乘せて、ステーション迄見送つて呉れた。愈々發車する時、無事の旅行を望むと云つたのが、朦朧と解つた。僕は我知らずメルシー、ボクーを腹の底から出した。

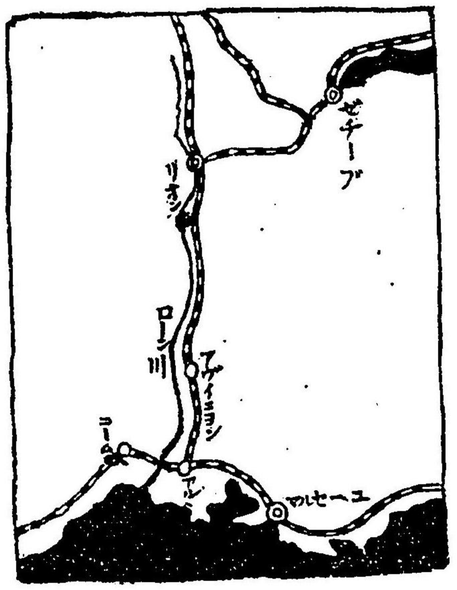
マルセーユよりリオン

□マルセーユのガール、サン、シャールを出たのが正午。勿論三等列車だが日本の二等位の設備だ。アル、タラスコン、アヴィニオン各驛を通過して、ローン河の左岸を奔つて、列車は段々北に進む。愈々リオンのガール、ド、ペラッシュの停車場に着いたのが、夕の六時五十分。自分は荷物を悉皆ステーションの荷物預所に托して、手ぶらで宿屋の探見に出懸けた。ローン、ゾーンの河の水は、滾々と流れて、夕の燈火を映じて宛も繪を見るやうな感じがした。

□リオンの地理は、マルセーユに居た時既に地圖を買ふて、豫め調べて置いたか

ら、ベラッシュの停車場に着いた時も、方角位は人に聞かなくとも略解つてゐた。

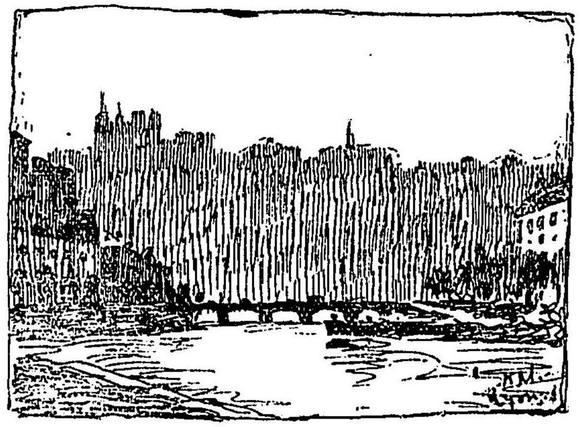
總て歐羅巴の町は日本の町とは違つて、概して規則正しいから解かり易い。自分は新らしい國々を旅行する時は、必ず前以て自分のゆくべき町を地圖で調べて置く。これは唯町の案内を知ると云ふ便利からのみでなく、地圖に就て未だ自分の知らぬ場所を彼であらうか、斯うであらうかと、想像する樂みからでもある。



第七圖

□此麼な工合からマルセーユに居た時、既にリオンに就ては、種々な想像が胸に浮んでゐて、リオンは此麼な所だとひとり極めをしてゐた。で自分の想像のリオンは華美な繁昌な騒々敷い、都會位に思つて居た。

□處が實際のリオンは其想像とは全く反對で極めて地味な、靜粛な、而も萬事が古風な町であつた。それに人間迄がマルセーユ邊とは全く違つて、大に質朴で又誰人でも親切氣がある樣に見えた。勿論佛蘭西人の事だからお客と見れば、誰彼の差別なく、惜氣もなくお世辭をふりまくが、同じお世辭でも自分等のやうな者にまで、見すかされる樣なお世辭者はリオンでは出遇はなかつた。



リオン市ソーン河

□リオン到着のその夕、自分の探しあてた宿はオテル、セントラルと云ふて、宿屋の名から想像すると、甚だ結構な宿の樣だが、實は小さな安宿である。停車場に着いてから自分で態々宿を探すなどは、如何にも不便ら

しく思はれるが、リオンが如何に古風な町でも、夫程に開けない町では無い、宿屋からは幾輛となく立派な馬車が客を迎へに來てゐる。到着すると直ぐに宿屋の若い衆に一聲かければ、そこは心得たもので、萬事不都合のない樣に、荷物萬端の世話をやいて呉れ、自分は澄して馬車に乘り込めば、默つてゐても然るべき立派な宿に案内して呉れる。こんな事は未だ日本では例が無いが、有繋佛蘭西だけに實に行き届いたものだ。

□以上の樣な工合に行き届いた宿屋の馬車が、既に停車場の出口に列んでゐると云ふに不拘、自分は何の酔興に不知案内の夜道を辿つて、態々宿屋を探したか。これが即ち赤毛布旅行の所以で、畢竟冗費を省く爲である。

□そこで先づ、リオン市の宿屋の部屋代を記すと、此麼ものだ。金滿家の投宿する第一流のグランドホテルなどの相場は扨として、茲に二三流の宿賃を掲げると、一夜四五法から七八法の間である。勿論三度の食事は別として、一夜四五法は佛

蘭西としては、別に高い方でもあるまい。併し日本の貧乏書家では、一夜四五法、即ち吾一圓五六十錢の部屋代は聊か分不相應でマルセーユ同樣、一夜二法位で結構である。此外未だ安い宿屋は幾何もあるが、先づ二法位で我慢するのが甚だ穩當と心得た。斯んな安宿は到底馬車などの迎へは出さぬ。此方から出張して探し當てるより仕方が無い。

マルセーユよりリオン

□さて自分の宿の町はリユー、デユボワーと云つて、町の中央である。美術館や市役所にも近い。勿論裏町であるから、その附近には相應の安飯屋もある。大抵一食が、葡萄酒を加へて、一法五十文位で食べられる。若し普通宿屋のテーブルに出れば、壹飯が三法、夕飯が四法位は取られると覺悟しなければならぬ。それに若し給仕人への心附を加へれば、中々安くは上がらぬ。

□佛蘭西では到る處の町に、安宿が澤山あるから甚だ便利だ。安宿と云つても相應の設備は調つてゐる。寢具など清潔なものである。日本の宿屋のことを考へれ

ば、大抵の所に行つても先づ辛抱は出來る。此種の宿屋では、三度の飯を喰はす家は、少ない、尤も朝のカッフェーは注文すれば呉れるが、朝起きる時間の定まらぬ自分等には、矢張目の覺めた時、勝手に近所のカッフェーへ呑みに行く方が却て便利である。

歐洲巡行

□佛蘭西では朝食には、パンとカッフェーの一杯を飲むで、濟せて置くのが普通で、王子でもやる人は、非常な贅澤となつてゐる。これを英國流に朝から魚肉や、獸肉を喰ふ事から比べて見ると、如何にも物足らぬ心地がする。又日本から新來の人は、最初腹が減つて我慢が出來ぬ、併し二三ヶ月も居ると、何時とは無しに、それが平氣になつて仕舞ふ。

□リユー、デユボワーの宿は、偶然外から見て、一寸氣に入つたから飛び込んだのだが、一人でこんな眞似をするのは、佛蘭西に來て是が初めてである。リオンでは徹頭徹尾、佛蘭西語で無ければ語が通ぜぬから、宿屋の談判も奈何しても佛蘭西

語を使はねばならなかつた。果してそれが通じて、首尾よく宿に泊る事が出來るかどうか、外國に來ては、そんな心配迄もせねばならぬ。宿屋の懸合はどうかこうか話が付いて、注文通り二法の室を借りる事にした。壁の塗りたての極めて明るい室で、電燈も付いてゐた。

□此宿の主人も主婦も、一見人が善ささうで、日本から來た畫家と云ふので、萬事親切にして呉れた。此宿の主人と云ふのは、頭髮が黑くて、日本人の樣である、又其面貌が文士戸川秋骨氏に酷似して、物を云ふて眼の端に皺をよせて、笑ふ愛嬌たつぷりの笑顔などは、如何にも秋骨さんである。自分はこの一事でも何だか知らぬ外國と云ふ寂しい氣は爲なかつた。尚も戸川秋骨氏とも云はれる方を、リオンの而も安宿の亭主に似て居るなどは、失敬千萬の話のようだが、餘り似て居るので、失敬とは知りながら茲に書き添へる。

□リオン市には、丁度サロンが開會してゐた。會場はソーン河畔の石造の（尤も歐

羅巴では木造や漆喰細工の建物は無い)素的に立派な建物で、入場せぬ内から吃驚した。繪はリオン市の若手の繪などが多く、何れかと云へば、先づ穩當な作で餘り突飛なやり口はなかつた。H.C.の付いて居る巴里からの出品も大分見受けた。

歐洲繪行脚

日本から新來の自分の目には、何れも面白く、間から急に明るい町に出た樣な氣がした。

□リオンには、又美術館の立派なのがある。この美術館へは、着いた翌日早速見物に出懸けたが、茲で最も有名な作が、ピユビース、ド、シャヴアンヌの壁畫である。尤も壁畫と云つても、矢張、カンヴアスに描いて、壁にはめ込むだのである。其他、普通の油繪にも、古今大家の作が多くあつた。就中珍らしかつたのは、ミレー筆の肖像畫であつた。

□この美術館で最初の滑稽の一つが、着いた翌日見物に出懸けた時に起つた。此處は日曜日を除く外は何時も見料として、一法を徴收する。乃で、一法を拂はふと

すると、昨日來停車場其他で、小錢は皆使ひ盡して、殘りは僅かばかりの銅貨で掻き集めた處で、一法にはならぬ。不得已持合せの英貨一磅の金貨を出した。すると、番人のマダムが、怪訝な顏をして居たが、早朝のことで釣錢の足りぬ爲か釣錢は歸る時にやると云ふ樣な意味の事を云つた。

□自分は兎に角美術館の事であるから安心して、先づ緩々と見物し、扨て歸る時釣錢を受取つて見ると、十九法より外ない。元來英貨一磅は佛貨廿五法餘に相當する。されば廿四法はどうしても受取らねばならぬのに、十九法は如何にも可笑しい。と云ふて、其儘五法の損を知りながら歸るのも殘念と、無覺束い佛語でマダムと談判を始めた。併し、片言の佛蘭西語でやるのだから容易に話が運ばない。

□終に自分は、午後一法を持つて來るから、其時金貨を返して呉れと云ふ事に迄漸く話を漕ぎ付けて、一文も取らずに其儘出場した。宿に歸つて、又他の一磅の兩替を宿の亭主に頼むと、廿四法替へなれば引受けると云ふ。近處に兩替屋はなし、

目下火急の場合であるから、其割合で兩替を諾して、盡食後早速美術館に行つて、一法を拂はうとすると、先のマダムは自分の間違であつた事と、尙ほ當地では一磅が廿四法替である事を云つて、既に兩替して廿三法の釣錢を出して呉れたそれでも十九法よりは、まだましであると諦めたが、結局美術館見物は、三法の見料を拂ふた譯になつた。

歐洲紀行

ロリオンでは、他國の貨幣の通用は、マルセーユ程自由でない、飲食店其他では是非佛貨で拂ふ必要がある。而も自分は、現に英貨の磅より持つて居ぬので、奈何しても兩替する必要がある。併しこんな土地柄、迂濶な兩替屋にも行かれぬと思ふて、不斗思ひ出したのが、横濱正金銀行の支店の當地にある事であつた。

ロ併し其銀行が何處にあるのか、一向に解らぬ、宿の亭主など勿論斯るものを知つてゐる筈もなく、一時當惑した。乃で日本領事館を尋ねて、銀行の所在を聞かうと往來で行き遇ふ巡査に、一々其事を尋ねた、漸々知つてゐる者に出會つて、其日

直ぐにローン河畔の領事館に出かけた、これで銀行の所在地も明白に解り、その翌日早速に行つて、持つてる英貨を悉く佛貨に兩替した。

ロ正金銀行の兩替は無論正確の相場で、一磅が二十五法餘で却て金が殖えた樣な氣がした。外國に渡つて兩替をうつかりしてゐると、時々とんだ目に遇ふ。

ロ三月二十九日ローン河畔の寫生から宿に歸ると、間もなく宿のガルソンが、一通の手紙を恭しく持つて來た、見ると領事館からのお使だ、是は實に意外千萬な事である。併し先づ不取敢開けて見ると、領事木島幸藏氏からの丁寧なる招待狀である。即ち水曜日の夜、晩餐を上げたひから是非來て呉れろとの文意である。自分等の如き一時の漂流客が、領事殿から御招待を受けるなどは、未だ一度も經驗が無いので、奈何御返事していいものかそれさへ解らぬ、併し有難く御受をするより外、途がないから、不取敢御禮を兼て御受を出して置いた。

ロ偖てその當日自分は、トロンクの底から、皺だらけのフロックコートを取出し

て、それを着て領事殿の御宅へ伺ふ事とした。其夜の御客は、自分の外に數日前リオンに來られた、神戸高等商業學校教授及び領事館の御役人方であつた。御馳走は純粹の日本料理で、奈何してこんな膳部が、リオンで出來たかと疑はれる程であつた。領事の令夫人は日本服を着けて出られたし、又外に海老茶の袴を穿かれた、未だ年の若い令嬢風の女學生も、給仕に出て來られた。室が西洋風だけで、總ての會話は勿論日本語、殆んど急に日本に歸つた樣な氣がした。唯不思議に思つたのは、五十以上の佛蘭西人のお婆さんが給仕に出て來て、飯の茶碗を出して、デウ、リー。シルブ、ブレーとやるなどは振つて居た。此下女は、其家に附隨した婆さんで、前領事の時から永年の間居ると云ふ事である。

ローリオンでは、重にローン、ゾーンの河畔に寫生に出た。丁度巴里のセイヌ河の河岸の樣な工合で、畫を描く場所としては至極好い。リオンにも中々呑氣な暇人が居る。魚が釣れるのか知らないが、日中肥大の男が釣をしてゐる。それを又見てゐ

る更に暇な人々がある。寫生をするため畫架を擴げると、直ぐに集まつてくるのが、何所でも同じ子供である。

ローリオンでは、概して柔和だ。特にリオンの子供は、柔和加減が著しい。中には外國人と云ふ觀念もないらしく、馴々敷く自分に身をすり寄せて、繪を見て親しげに話しかけるのもある。日本の子供にあり勝ちの人見知りとか、羞澁むとか云ふ樣な事は殆んど佛蘭西の子供の知らぬ處であらう。

ローリオンでも寫生の時は、子供を相手に會話の練習をやつたが、一日ローンの河岸で面白い事があつた。例の通り河岸の石段に腰をかけて、頻に寫生をやつて居ると、自分の傍に又一人の子供がやつてきたらしい、さうして肩にもたれかゝつて見てゐるらしい。自分は今一生懸命の場合であるから、そんな子供の事などを省る事は出來ぬから、何の氣にも留めず續いて寫生をやつてゐた。すると奈何も可笑しいのは子供にしては何時もより鼻息が強い、さうして自分の襟の處に激

しい鼻息を吹きかける。餘り不思議だから何の氣なしに、後をふり向ひて見ると、思ひきや子供と思つたのは、眞つ黑な佛蘭西でムートンと云ふ犬であつた。

□ムートンの毛は黑く長い。それか必ず獅子の樣に、前足の邊から尾のあたりまで短く苅つてある。首と尾の先に長い毛を殘してある。自分が不意にこのムートンを見た時には、驚いた。日本では餘り見慣れぬ犬でもあり、それにまさか、犬が自分の肩にもたれて居やうとは思は無かつた。

□佛蘭西では子供と動物、馬や犬や猫なども柔和に馴れてゐるのは、特別に嬉しく感ずる。子供と動物を一緒にするのは、甚だ亂暴の樣だけれど、此方の仕向け次第で、慣れもし怖もする自然の無邪氣な處は好く似て居ると思ふ。佛蘭西人は子供を愛することが非常である。これは自分の生むだ兒等の意味では無い、誰彼の差別無く一般子供に對して如何にも親切である。

□馬方や船頭の樣なあらくれ男でも、不見不知の子供に對して、如何にも温かい

情を持つて細かい世話などをしてやつて居るのを、見たことが往々あつた。一般子供のする些細の惡戲などは、餘り喧しく小言めいた事は云はぬ、子供の方でも一度云はれた事は、直に聞き分けて、柔和に大人に服從して居る樣である。これは中流以上の紳士の子女の事を指すので無く、パンを横嚙りにする下等細民の子供に對する話である。

□動物に對しても、歐洲人は日本人と其感じが餘程異つて居る樣である。佛蘭西人の牛馬犬猫に對する愛情は、到底日本人には想像も付かぬ。從つて動物の人間に馴れて居る事も甚だしい。斯う人間から愛を受けて、育つて來た動物同志の互々に親密な事も、日本では容易に見られぬ事と思ふ。犬と猫が一緒に寢て居ることなどは、決して珍らしく無い。唯だ家畜のみで無く、鳥などもそうであつて、手に止つて掌の餌を喰ひに來る雀なども居る。

□リオンの町から一時間ばかり輕便鐵道に乘つて、ソーン河の上流に行くと、フ

オンテイスと云ふ村に出る。茲はソーン河に沿ふた景色の極めて好い處である。此邊は都會の空氣が薄く、如何にも田舍地味て居て、風俗なぞも當材として持つて來いと云ふ雅致がある。村の娘なぞは帽子など被つて居らぬ。桃色や水淺黄の

歐洲

キャラコの前掛をしめて、木靴を穿いて、村の敷石を優長に歩いて居る。自分が當の道具を肩にして通り過ると、日本人と云ふ事を知つて挨拶をする、こんな村に長く滯在したら、奈何に愉快であらうかと思ふ事が往々あつた。

給行脚

□時は四月、櫻桃梨花共に開くと云つた調子で、花の盛である。眼界のつかぬ樣な綠の原野が遙の村に連なつて、其邊には山羊や綿羊が牧草を喰ふて居る。此村からリオンに歸るには、輕便鐵道の外に、尙ほ普通の瀘車もある。何時も往復別の道を取つた。リオンの附近には Comptoir と云つて、酒屋で一種の飲食店を開いてゐる家が到る處にある。これは普通のカッフェでは無く、今少し要領を得たものだ。

□自分は田舍に行くと、何時でもこの Comptoir に這入つて食事をした。ボターヂ

でも燒肉でも、又魚のフライでも三四種の料理は出來る。勿論食事の時葡萄酒も出す。給仕人は大概其家の娘か、お神さんか、婆さんがやる。客は近所の獨り者か、通行の旅人が這入つて喰ふので、極めて平民的な呑氣極まるものだ。自分は料理の名が解らぬので、臺所に出懸けて指をさして、注文した事があつた。

瑞西國ゼネーブ

□フォンテンヌのめし屋の主婦さんは、まるで昔の銅版畫にでもありさうな風彩の女で、めしを喰ひながら、其無邪氣な擧動を見て居た許りでも、脫俗した好い氣持になる。其又亭主がビーア樽の傍な肥へた老爺で、自分が行くと必ずボンヂユール、モッシューと云ひながら、手を出して挨拶に出て來る。此麼家で飯を喰ふと一法二十文位で濟む。

瑞西國ゼネーブ

□四月九日。十七日間のリオン滯在を終へて、瑞西ゼネーブに向つて出發した。

初はゼネーブなどに行く氣は無く、直ぐ巴里に行く積りであつたが、地圖など見て、聊かの廻り道だから序と云ふので、急に行くことにした。前夜木島領事を訪ふて、海苔や福神漬の鑑詰を頂く。宿を立つ時、宿の隣に Factage と云ふ看板が出て居たので、トロンク、鞄など停車場迄の運送をこれに頼むだ。ペラッシの停車場迄總て運送料が一法五十文。零時五十分の發車で、自分は晝食を濟せて、電車で停車場迄行つた。リオン、ゼネーブ間の滊車賃、三等、八法三十サンチーム。時間は急行列車で三時間餘。

ゼネーブ湖畔

口午後四時頃に無事ゼネーブに着いた。此所でも未だ荷物を受取らぬ先に、呑氣

さうな宿を探しに町へ出た。ゼネーブは避暑客の群集する所で、立派な宿屋がゼネーブ湖畔に面して無數にある。これ等は皆贅澤を盡す金持西洋人の行く宿だから、自分等には何の關係も無い。幸ひオテル、ドラクロワ、ブランシエと云ふ小さな宿を一軒探し當てた。

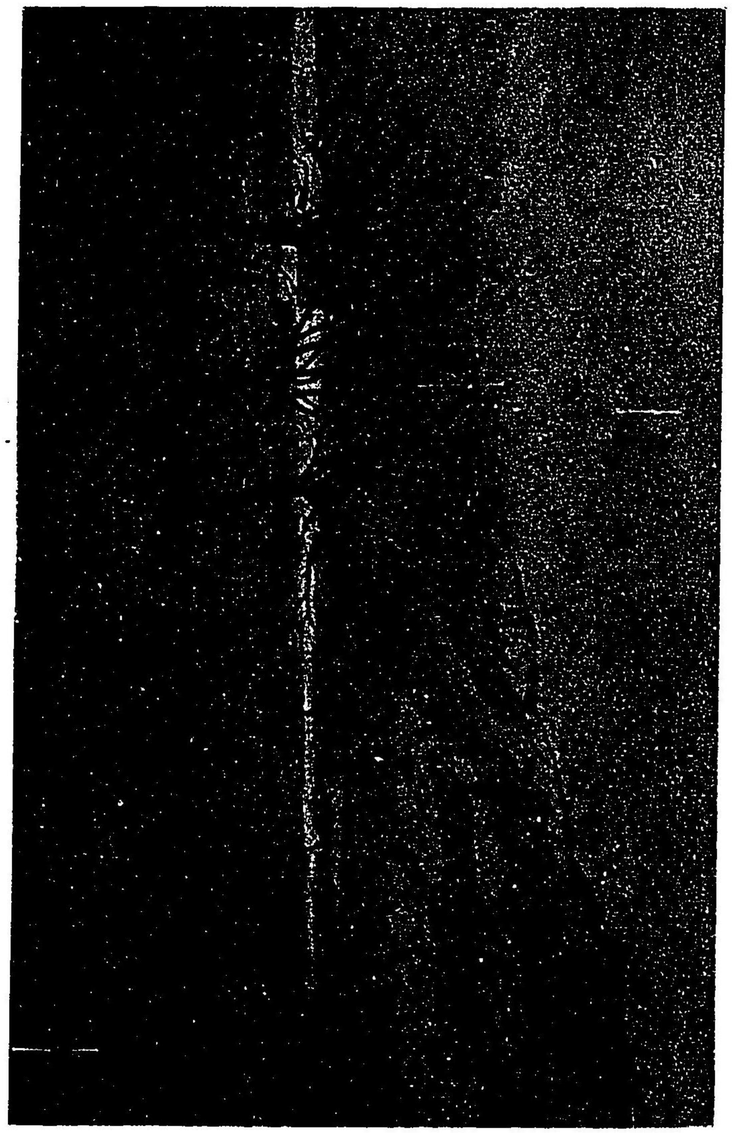
口最初投宿を約束する前に、夕食を一仮喰ふて見た。食物も先づこれならばと安心して、一日一法五十の部屋を借りる事にした。人間の眼は恐ろしいもので、此方が一生懸命本氣の沙汰であるから、神經が過敏になつて居て、一目して大概其宿の模樣が解る樣になる。論より證據は先づ自分の眼鏡で瞰んで置いて、それで失敗したことは一度も無かつた。此宿では相應に美味いものを澤山喰はして、三食附で一日五法で居られた。

口四月十日。今朝は日曜日で、早朝から樂隊が宿の窓下を通り其音樂で眼が覺めた。何所に行つても少しは片言が通る樣になり難有い。新らしい地に出發する毎

に、會話の試驗をされる樣だ。宿屋、洗濯屋、ステーションの掛合など前日の下調べは非常の苦辛だ。ゼネーブは殆ど佛蘭西と違ひは無い。町の人は皆佛蘭西人許りだ。瑞西の通貨は別に極つてあるが、佛貨が何所でも自由に通用する。唯郵便局では自國の通貨でなければ取らぬと頑張つて居る。

ロゼネーブに來て、最初困つたのは時計であつた。當地では何所に行つても皆二ツの時計を持つて居る。一ッは即ち佛蘭西の時(L'Heure de Paris)で、一つは瑞西の時(L'Heure de Centrale)である。其間五十分の差がある。だから佛蘭西の時計が午前の九時を打つ時には、瑞西の時計は未だ八時十分過ぎである。唯何時に滊車が發着するでは解らぬ。必ず巴里の時とか、瑞西の時とか云ふ斷りが必要である。停車場、郵便局等は申すに及ばず、宿屋、料理屋其他カッフェーでも到る處、皆時計は二ッ飾つてある。慣れぬ者には甚だ紛らはしい。

ロリオンからゼネーブに來る途中 Amberieu, Culoz. 邊の風景と云ふては、何とも驚



瑞西ミヂーノの郊外

樣の無い美しい。此邊は未だ佛蘭西の內だが、最早瑞西に這入つた樣な氣がする。其景色は舶來のコロム版を見る樣で、迚も瀘車の內に落着て居る譯には行かぬ。日本では見る事の出來ぬ數十丈の崖崩れの樣な灰色の山が、空高く聳へて、其中腹に村落が見える。人家の屋根は皆赤瓦で、白壁の高い敎會の塔なども見える。廣い綠色の牧場の草原には、無數の群羊が野飼になつて居る。瀘車は矢の如く奔つて、こんな景色を飽きる程見せて呉れる。

ゼネーブに來て、世の中が急に美しくなつた。ゼネーブの町は、まるで有平糖で拵へた樣な町で、家屋などの立派で華美なことは云ふ迄も無いが、往來の淸潔で平坦なことも、昨日か今日出來上がつたものゝ樣な氣がされる。又湖水は透明で深い底の石迄が明かに認められる。ゼネーブの町に來て、著しく眼に付くのは、子供が往來をローラスケーチングで盛んに滑つて居ることだ。小娘か角のパン屋に買物に行くにも矢張スケーチングをやりながら使に行く。ゼネーブは外國の

遊覽人相手の地だから、吾日光とか箱根とか云つた調子に、人氣が惡るく、定めて居心地の感心せぬ處と想像して居たが、實際は人氣の極めて可い處で決して貧る樣な風も無い。先づ一日でも長く居たいと云ふ氣が起つて、自分なども我不知玆に十日餘も足を留めてしまつた。

ロゼネーブの近郊にベリエールと云ふ村がある。此所は佛蘭西と瑞西の國境で、身は瑞西に居ながら、佛國の Mt.Salève. の山を眺めることも出來れば、佛蘭西のその山からゼネーブ市の湖畔に添ふてる繪の樣な風景も見下すことも出來る。自分は、ゼネーブの町から電車に乘つては、度々其所に寫生に行つた。途中に水車場などがあり、其傍に酒屋の店などもある。白葡萄酒小瓶壹本が僅か、二十サンチーム、水車場の水の音を聞き、遠く雪を頂く連峯を眺めながら、その葡萄酒を傾むける。實に何とも云へぬ心地になつて、ゼネーブに歸るのも忘れて了つたことがあつた。

ロ四月十八日未だ殘り惜しいゼネーブを立つて、巴里に行かうと、コーナバンのステーションを夜の八時五分に立つた。巴里迄の三等賃銀三十法八十サンチーム。時間は約十一時間。ステーションを立つ時、切符を買ふたり荷物など預けて居ると、不斗札賣場で一人の男と互に顏を見合せて、オーと云ふ樣な譯。此男は、毎日同じ宿屋の食卓で一緒に食事をした佛蘭西人であつた。平常は、平服を着て居たので、何の職業か一向にその身分が解らなかつたが、今ステーションで正服を着て嚴然として居る姿は、まるで別人の樣である。尤もこの男は既に懇意になつて、日本の繪葉書をやつたり、又日本の一錢銅貨なども紀念にやつたりした間柄で、此日の前日紀念に其人の記名を賴んだ、時正直に鐵道會社へ勤務して居ると云ふ事を書いて呉れた。併し今此所で、逢ふとは思はなかつた。汽車に乘り込む時互に握手して別れた。

ロゼネーブを發車して La.Plaine. 驛に着いた。此所は瑞西と佛蘭西の國境である。

税關の役人が細い鐵の棒を持つて來て、滊車の腰掛の下などをかきまぜたのには驚いた。ゼネーブを立つ時から列車の中に客が僅に三人、寢やうが起きやうが勝手次第だ。ステーションでは枕と毛布とを一法で貸して呉れる。蒸滊管が通つて温めて呉れるから、寢臺車に乘込むだ心地と違はない。

□翌朝滊車がフォンテヌブロー近邊を通過する時、早起の百姓が白牛を數頭使ひながら、灰色に霞んだ畠を耕して居た。まるでロザ、ボンヌールの繪を見ると違は無い。車中で知れきつた話だのに、會話の稽古と思つて、睡むたさうな眼をしてボンヤリしてゐる田舍のモッシューをつかまへて、巴里に行くのですかとか、何時に着するのですかなどと、やつて見る。すると先方は親切に一々答へて、呉れる。言葉が通じたと思ふたびに、其愉快と云つたらない。巴里に段々近付くと夜がそろ〳〵明けて、煙突などから、熾んに白い煙が上がる。氣の所爲か世間が何となく騷々しくザワ〳〵して來る。斯うして朝の七時に無事、ガール、ド、リオンに安着した。

灰色の巴里

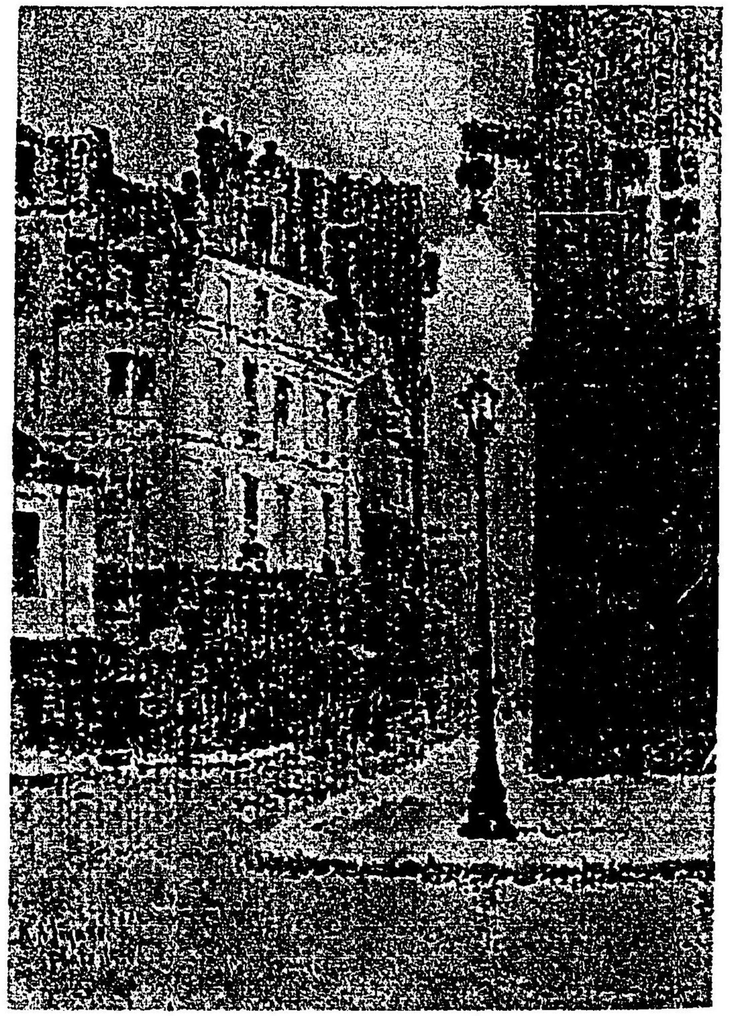
□巴里に着いた朝は灰色に曇つて、小雨が糠の樣に降つて居る。一と先づ宿所に落着きたいものと、豫て某友に敎へて貰ふた、ケー、サン、ミッシェルの宿屋に行つた。宿の前通りには、古本屋の店や又た古錢や何かを賣る大道商人が店を張つて、堪らない面白い所である。一先づ宿に腰を下して、何は兎もあれルクサンブール美術館を見物に出懸けようと、サン、ミッシェルの大道をブラ〳〵行く。ブルヴアルの並樹は、綠の若芽を出して、暖い風がソヨ〳〵と吹き、實に何とも云へぬ氣持。往來を歩きながら誰か日本人に出遇はないかと、氣を付けて通つたが、一向に影も見えぬ。唯二三人の支那人にすり違つた。支那人は何れも其風彩や服裝など、遙に日本の畫學生よりは立派だ。少し位ではない、外見から云ふと、テンデ彼等の

足元へも寄付き得ぬ。

□四月二十日。昨朝折角來て暫時逗留の約束迄した、ケー、サン、ミッシエルの宿を今日急に引拂ふことになつた。これは昨夜、終に一睡も出來なかつた爲であつて、歐洲巡行

瑞てゼネーブで氣焰を吐いた、自分の眼で、一瞬みすれば大體間違は無い積の筈が、今度此宿では大失敗をやつた譯である。尤も此宿は、友人が暫時居た宿と云ふので、一瞬をツイ油斷した、と云ふのは此宿の南京虫の多いこと誠に何とも話にならぬ。寢臺の枕の下などは云ふ迄も無く、室の壁に這ひ出して居るのも、其數少なくない。マルセーユ以來今日迄幸ひ南京虫だけは避けて居たのを、巴里に來てこんな襲來を喰ふとは案外であつた。其夜は到底寢臺には寢られず、床に毛布を敷いて、堅い板の間に横になつて見た。

□翌朝宿の亭主に引越を申し出た。餘り俄なので亭主も驚いたらしく、床虫が居るなら他の部屋と替へたらうと云つたが、一瞬みした處、何所の室にも居



佛國巴里の町

さうだ。奈何しても一思ひに移轉した方が得策らしいので、比較的高い二日間の部屋代を拂つて、早速此宿を逃出すことに極めた。併し何所に行つて可いか未だ引越す先も定まらぬ。そこで先年一時厄介になつてたパンチオンの横町のオテル、ヴォクランに行つて見たずると以前よりも見附が綺麗になり、繁昌もして居る樣子。先年知り合の主人に遇ふて、部屋を掛合つて見ると、亭主も自分を覺えて居てくれて、大變に喜び、中庭を通り抜けた二階の一室を貸して呉れることに極まつた。今度は虫も居ず部屋も清潔、部屋代も以前の一ヶ月三十五法に引換へて、一ヶ月二十五法の割だから旁々早く移轉したのが幸だつた。

灰色の巴里

ロケー、サン、ミッシエルの宿屋では、老人のガルソンに前日漸く上げて貰らつた重いトロンクを、四階目から態々又下に運ばせて、移轉をすると云ふ騒動。此日も又雨で陰氣臭い事夥しい。前夜眠られ無かつたので、虫が何匹取れるか試めして見やうと、一つ宛つかまへては蠟燭で燒殺して見た。何時の間にか机の上に二十

五六匹の死骸がヅラリと列んだ。餘り剛腹だつたから、白いタオルの上に其死骸を陳列して出て來てやつた。移轉した宿屋は、先年藤村、河合兩氏の篤い周旋で懇意になつた宿で、唯だ部屋のみを貸す宿である。

□巴里に來ると妙に自炊がしたくなる。部屋に火の氣が無いと寂しくてならぬ。これは日本から來て居る美術學生が多く自炊的生活をやつて居る所爲であらう。自炊道具を買ひに出懸けた。先づ第一にコヒー、コヒー沸し、アルコールランプ、茶碗と鍋、ナイフ、フォーク、一寸これだけあれば一通りのことは出來る。

自炊道具

□朝起きて二三軒先のパン屋にパンを買ひに行つて、自分でコヒーを拵らへれば、それで朝めしが濟む。外に喰ひに行つたつて自分のやるのと少しも變りは無い。唯變つて居るのは直段の高い許りだ。晝飯は大體寫生に行くとか繪を見にゆくので外出勝だから、相當のレストウランを探して其所で喰ふ。ソッジ、肉、野菜、菓子。それにパンに葡萄酒が付いて、一法二三十サンチームから一法六七十サンチーム迄の間で喰へる。此點は有繋に巴里は大都會だけに生活費用は安くて濟む。

巴里留學中奈何な贅澤でもして來たかの樣に吹聽する連中でも、其實大概此邊で切上げて居たのが多い。未だやり樣ではもう一層安く暮す方法もある。

□四月二十一日。この日は巴里に着いて三日目。打續く灰色の空が漸く晴れ渡つて、美しいコバルト色の晴天。窓から强い光線が差込んで、眼が覺めた。そこで今日は途中の景色を探り旁々、豫て依頼を受けたヴキル、ドアヴレーのコローが舊家を寫生に行かうと思ひ立ち、顏を洗つて、宿を飛びだした。時計を見ると既う彼是九時過ぎである。朝飯をやつて、モンパルナスの停車場に驅け着けたのが十時半。

汽車は今發車した處。暫時待つて、十一時五分エルサイユー行の列車を待つた。

□マラコッフ、ムードン、ベルビユー驛を過ぎて、セーブル驛に下車した。ヴキル、ダアヴレーのコローの家は、先年藤村、河合諸君の案内で、一度來たことがあつたが、大體の見當は解つても、此所からは、何の道だか、今一寸解らん。そこで坂の下からやつて來た老人に道を尋ねた。道は、グランド、リユー、デ、セーブルの大通へ出てそれから横町へ這入つて、ガール、ド、サン、ラザールからエルサイユー行の鐵道の橋の下を通つて、リユー、デ、セブールと云ふ大通を又眞直に行く。すると今度は、エルサイユー街道の大通へ出る。此所まで來ればもうコローの家までは遠くはない。

□そこで左手にあつた、小さな酒屋に這入つて壹仮を喰つた。時は丁度十二時半。血の流れるやうなビフテッキと二尺もある長いパンを食つた上に、菓實をやつたのだから腹はそれで充分。少し許りの白葡萄酒に顔の色をホンノリと赤くして、エルサイユー街道を左へ行く。左手の二つ目の横町を下へダラ〳〵と下ると

直ぐ其處がコローの家で、其右手の池畔に大理石で彫刻したコローのレリーフの石碑がある。七年前に來た時と少しも變らず池水は靜かに周圍の森の倒影を印してゐる。コローの舊家の裏園には綠の若葉が一面に吹き出して、グリーン一色で塗立つた繪に遂はぬ。六角堂の小さな狹い畫室は綠の中に住人なく今も尙ほその儘になつてゐる。自分は夕暮手元の見えなくなる迄スケッチを試みた。

ヴキル、ドアフレー
コロー石碑

右　藤村知子多君
左　白井雨山君
著者

□四月廿六日の朝、ルクサンブール公園で、ヒョックリ和田三造君に遇つた。昨日田舍から歸つたとの話。それで初めて日本人に遇ふた譯だ。途中の邂逅で急に話

も出す再會を約して別れる。

歐洲給行脚

□四月廿九日。この日朝から雨天。早朝からサロンを見物にゆく。有繋にサロンは矢張サロンである。田舍漢の自分は何を見るも嬉しく。頻に見惚れて居ると、突然後から『三宅君では無いか』と肩を敲く者がある。意外に思つて振返ると、白耳義ガンで勉强されて居る畫家太田喜次郎君だ。今サロンを見物するため態々ガンからやつて來て、ガル、ド、ノールに着いて、早々飛んで來た處だと云ふ。奇遇とは此事だらう。尙ほ傍に髭をはやした紳士が同伴して居る、太田君に此方は誰方でと叮嚀に紹介を求めると『君未だ知らなかつたか』と、笑ひながら『これは兒島虎次郎君だねー』と微笑される。成程能く見れば兒島君に違ひない。自分は東京で、美術學校の正服を着た同君は見たことがあるけれど、今の兒島君は全く別人と思つた。三人で彼方此方の畫を觀出放題の駄評を試み暫時して別れた。

□その晩、三造君の畫室に日本めしを喰ひに行く約束であつたので、カンバンブ

灰色の巴里

ルミュール街の畫室へ、夕刻から押懸けた牛のすき燒をやらうと夫れ〳〵買物をして、各々得意の手料理を始めて居ると、忙しい人の足音が段々に近く聞こえてきた。忽ち、誰れか來たと見えて戸をコツ〳〵叩くものがある、開けて見れば先刻サロンで遇ふた太田兒島君である。『ヤーこれは珍らしいな。今君等の噂をやつて居た處だ。まあ這入り給へ』と、不相變の三造君の愛嬌で、室內急に賑はしく、其內彫刻家の畑正吉君と他に又一人が加はつて、都合六人の同勢、狹い一室に首を集めて、牛肉鍋をつツつき且つ飯を掻込む。話は日本語ゆゑ自由自在、久振りの鬱散に十二時頃迄のべつ幕なしに話す。その所爲か自分は胸の裡が輕くなつたやうに覺えた。太田兒島兩君は又近日ガンに歸つて引續き彼方で勉强されると云つて居られた。

□五月十五日。今日は珍らしい晴天。實に再生の喜悅。先日來十日間程灰色に曇つて霰など降らした底冷のする、倫敦のやうな氣候。巴里もその時許りは、厭だと思

つた。一昨日雨を侵して、陰鬱な新設の地下線で、大使館に手紙を受取りに行くと、すると彫刻家の荻原守衛君が死去されたとて、其肖像迄が時事新報に掲載されて居た。君は曾て今自分の居る宿に居られたことがあるので、先月其由を同君に通信したが、今は空しく其葉書も君が位牌の前に達したであらうなどと思ふて、其日は碌に飯も咽喉に通らず、況して不愉快な天氣が手傳つて居るので、尙更に堪られぬ感にうたれた。

毎度ながら此厭な氣候には閉口する。日光の裡に育ち、青空の下に生れた、日本人なる自分は、意地にも、この氣候を賛成することは出來ぬ。今から思へば、南部佛蘭西の天氣が戀しい。明十六日には菊地、白瀧兩君が倫敦を出發し、パーレム、アムステルダムからアントワープを經て、ブラッセルに出て、二十日頃に巴里に、着との手紙が昨夜來た。菊地君は、白瀧君と共に伊太利を巡廻される由、或は同君も、最早歸朝されるのではあるまいかと思はれた。

巴里凱旋門ナポレオンの墓

□自分は當地を一日も早く去りたいが、少し事情があつて、豫定日數よりも永く居つた。當地に來てからは、何だか外國に來て居るような心地が失せて、リオン邊の面白味は更に無い。巴里も愈々ニューヨーク流に唯だゴタ〳〵して來て、先年の風雅を見る事が出來ぬ。兎に角北風の底冷のする妙に不愉快な寒さは自分の第一に閉口する處で、この風に吹かれると、日本のことを思ひ出す。伊豆邊りが心の底から懸しくなる、歐洲ではこの風と南京虫との二ッが一番堪らぬ。

灰色の巴里

□巴里滞在中には、勉めて多く繪を見た。サロンは云ふ迄も無く、各所の展覽會も中々詳細に見物した。何と云ふても、巴里は巴里だけの事がある。自分は、妙にアーテスト、アンデパンダン展覽會に多く興味を持つた。この展覽會には可驚佳い繪があると思つた。サロンに出て有名の大家の作畫より却て嬉れしいのを往々見受けた。尤も其七八部は素人の惡戯の樣な話にもならぬ駄作で埋つて居て、玉混淆の觀があるが、その不調和が又た何とも云へぬ愉快だ。出品畫は、殆ど三千點

に近い。會場はセーヌ河の畔りて一時の假小屋の樣な建物で、畢竟天幕式の觀物小屋に過ぎぬ。巴里の中央に今尙ほこんなものゝあるのは大に面白い。これを思ふと、東京上野の二號館などは繪の割合に建物が勿體無いや、うな氣がする。

ルーミエーヨシ、ドンラク　塾

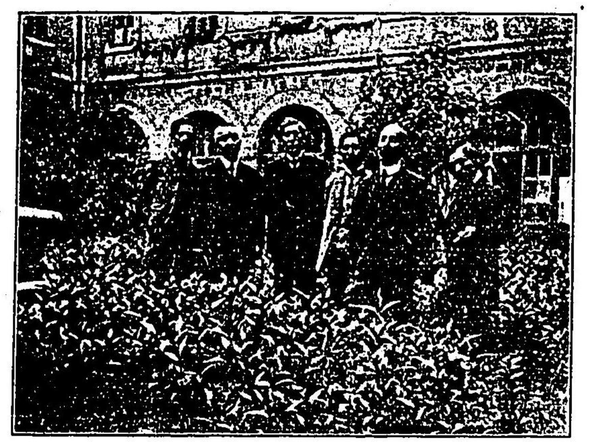
□巴里滯在中は重に郊外に寫生に行つた。ボア、ド、ブーロンニュやボア、ド、ヴアンセンヌの夏景色は中々惡く無い。何時行つも寫生に來て居る勉强家に遇はぬ日は無かつた。野外の寫生に倦むだ時や、雨が降つて退屈な日は、和田三造君のお供をして、

グランド、ショーミールのアカデミーに行つた。これは私立畫學校で、この學校の畫室には夕の五時から二時間宛、毎夕クロキーの科が開かれる。即ちモデルをスケッチする稽古である。モデルは自分で勝手の姿勢をして、三十分毎に新しいポーズをやつて呉れる。

□モデルは中々慣れたもので、此方で一言の注意が無くとも、實に巧な姿勢をやる。この科へは紹介人が一人あつて、出席の都度五十サンチームを拂へば、他に面倒な手續など要らず、誰れでも出席して、自由に稽古することが出來る。出席の畫家は男も居るが女も中々に多い。又上手な人も下手なのも居る。毎度此所に行く毎に、日本にも此麼な所が一ッでもあつたら嘸ぞ可からうと思つた。

□彼是して居る内、日本人は四方より一時に集まつて、中々賑はしくなつて來た。菊地、白瀧兩君は和蘭からブラッセルを經て、五姓田、東城、茂木其他の諸君は、倫敦から。茂木君は自分の宿に投宿された。其他の諸君は、スフローの宿に詰めかけて、

殆ど滿員の有樣であつて、毎日毎夜の見物で、中々忙がしさうに見えた。倫敦から來遊された諸君は、巴里の町の不規律で、往來の不潔な而も風紀のだらしの無いのに、異口同音盛に攻擊の矢を放たれたが、成程萬事嚴格な倫敦の町に比べては、そんな感じもあながち無理では無い。



大隅公造君
白瀧幾之助君
茂木習吉君
菊地錠太郎君
和田三造君
著者

口一週間ばかりは朝夕日本人の出入で、スソロー附近の賑ひは近來に無かつた。その内五姓田、東城兩君は獨逸に出發され、續いて白瀧、菊地兩君が伊太利に向つて立たれ、最後に茂木君が歸朝乘船の爲め、マルセーユに立たれ、後の巴里は急に寂しくなつた。其上又た和田

英國ウォルターズ海岸の景

三造君も田舍に行かれると云ふので、自分も兎に角英吉利に行く事にした。

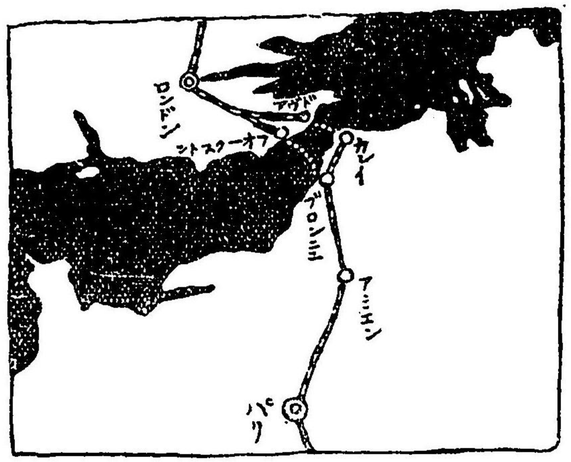
□毎度同じ考を起すが、巴里へ來ると水彩畫は繪でない樣な感がする。繪は到る所澤山あつても皆油繪ばかりで、水彩畫の碌なのは殆ど無い。郊外に寫生して居る畫家の畫も、これは一寸見られると思ふのは、皆油繪だ。偶々水彩畫を描いて居る人に出遇ふと、英國か米國邊から遊びに來て居る素人畫家の下手糞許りだ。こんな工合だから、何だか水彩畫の影が薄くなつて、自分こそ描いて居るものゝ、如何にも馬鹿氣た樣な氣がする。水彩畫と素人とは、日本許りでは無く、歐羅巴でも矢張緣の深いものと見える。

巴里から倫敦

巴里から倫敦

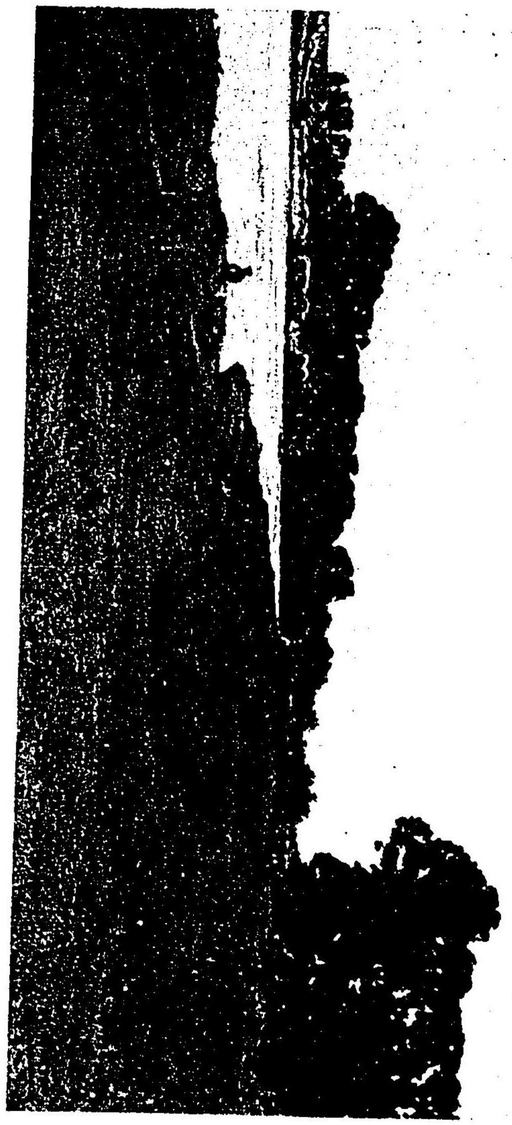
□六月一日の夕、ガル、ド、リオンから出發された茂木習古君を見送つて、其翌日、三日の午後二時卅分、ガール、デュ、ノールの停車場から、倫敦に立つた。此線は、ブーロ

ンニユ、フオークストーンを經由するのだが、ガール、デユ、ノールを立つ時、一昔前初めて巴里に來て、此所から矢張英吉利に立つのを、岡田君に送つて貰つたことなど思出した。其時も矢張午後二時何分とかの列車に乗る筈だつたのが、餘り呑氣に話込んで居たので、終に其列車に間に合はず、夕四時過ぎの列車に乗つた。

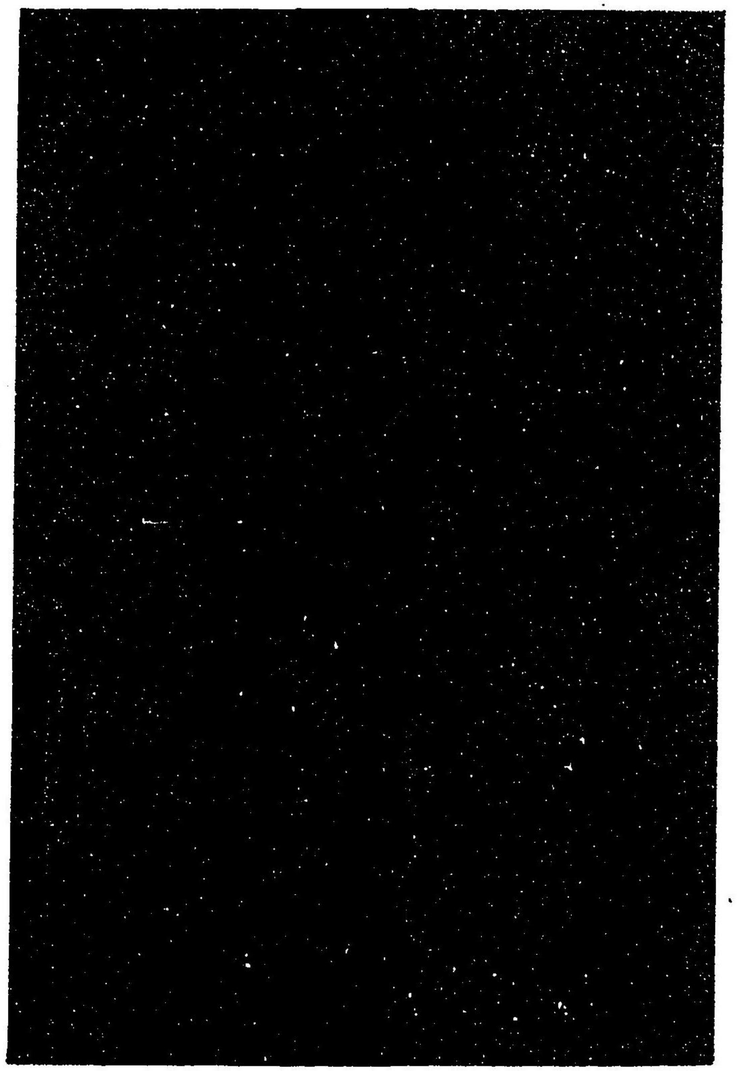


第八圖

口處が其時には同じ英吉利行だが、カレー、ドーヴアー經由で、自分の買つた切符と線が違ふ、それが乗込んで暫く立つてから氣が附いたので、何とも致方が無い。そこで何でも夜中十二時頃に、途中のブーロンニユに降りて、漸く停車場の係員に頼み込むで、英吉利に渡る荷物船か何かに乗せて貰ふて、無事

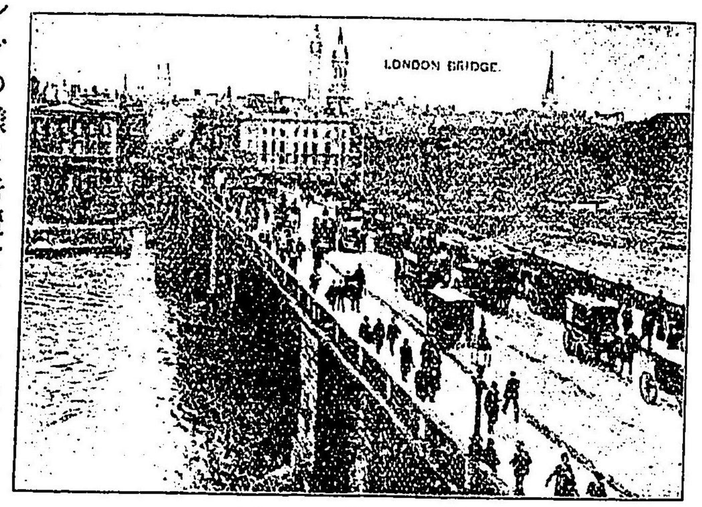


第九圖　ドーヴアー海峡



英國ヘーナンの星

フォークストーンに着いたのであつたが、走つて居る汽車の中で、そんな昔の追想に耽つて、何時の間にか、ブーロンニュに着いた。これからドバーの海峡を船で二時間もかゝつて渡るのであるが、急に北風が寒くなつて、甲板の上では外套が無ければ居られぬ。



倫敦橋

ロ巴里を立つて倫敦のチャーリング、クロッスに着た時、京都から東京に歸つたやうな心地がした。早々貸間を見附て、其翌日から美術館廻りと寫生を始めた。當地のアカデミーには非常に失望した。何だか飾りランプの様に奇麗だけれど氣の毒な程光りが無い。丁度此頃、サージエントが肖像

を中止して、盛んに風景を描いて居たが若返つて筆などの勢を認めた。

□六月五日この日はケンシントンの宿を出て、地下線でハムプステッドに寫生に行つた。驚いたのは十二年前と殆んど少しも變らず、唯小さい木が育つた位。此所は何時も別世界である。小供が廣い草原で遊んでゐるのを遠方で聞いてゐると、まるで、ナショナルリーダーを讀むのを聞く樣な氣持がする。雲めしはノースコート、マンションと云ふ家の前の小さな料理屋に飛び込む。店の中の戸に更に一等御食堂とあるから、試しに這入れば、テーブルは蠟石だが腰掛は荒木で、市中にては見られぬ風雅なもの。

ハムプステッドにて撮影（著者）

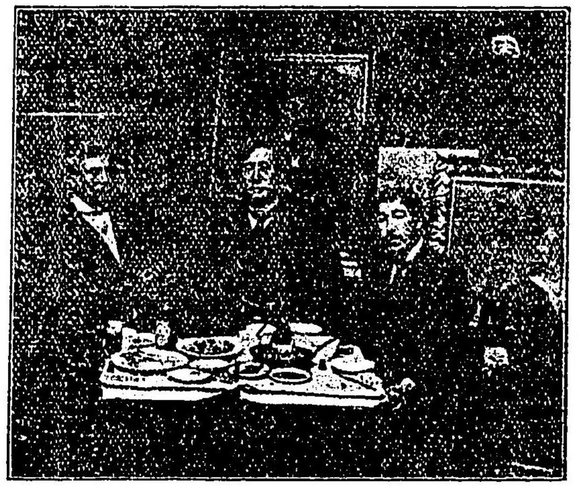
□部厚な燒肉に、ポテトと、キャベツ顏の這入りさうな大形のコップに、コヒーを

倫敦ノトラフメヤミテ（一ノ）

一杯も飲めば、腹は充分。めしを食つてそれから、又原に寫生に出かける自動車が坂の下から駈け上がる。仁王の樣な大男の巡査がブラ〳〵と坂の上から降りて來る。オーク、ツリーが綠に茂つて、其蔭が敷石に鮮やかに印されてゐるのが何か夢のやうで、遠く日本のことなど考へ出して、獨りで思はず微笑んだ。

ハムプステッドのめし屋

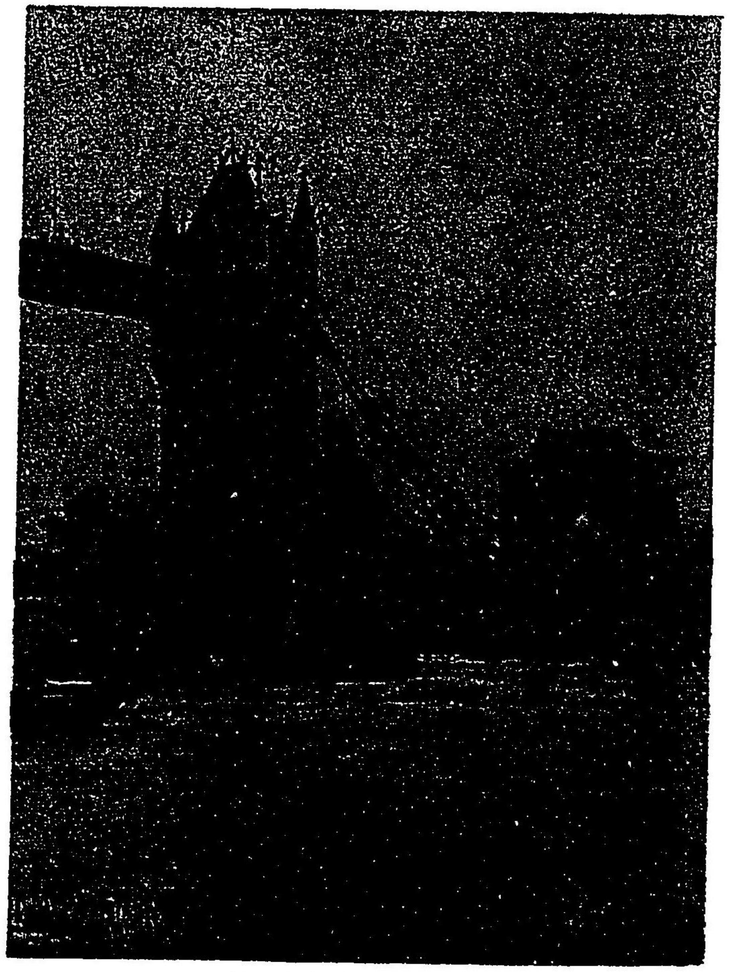
□倫敦滯在中は、餘り日本人に逢はなかつたが、唯武内鶴之助君の畫室には屢々遊びに行つた。君とは日本からの知合だが、倫敦で、斯く逢はふとは豫期しなかつた。君はチエルシーに近いニュー、キングス街に畫室を構へて頻に勉强されて居る。チエルシー附近は、先づ美術家の巢屈とも云ふべき所で、美術の空氣に乏しい倫敦市でも、此邊に來ると少しは賴母敷樣な氣がする。



武内龜之助君　著者　高木誠一君

口丁度自分と前後して高木誠一君が、新に日本から渡來されたので、何時も武内君の書室に集つては、一緒に面白く話した。武内君の御自慢の手料理は、マカロニとベーコンの煮附けである。隨分鹽辛い料理だが、やつて見ると中々に美味い。辛くて咽喉が渇いたら水は無代だから、遠慮無く澤山やつてくれと、何時も大笑をしながらその御馳走に舌鼓を打つた。

口倫敦に居た間に一寸用がわつて、博覽會附近に往つた。處が五十位の婆さんが日本服で雪駄を穿いて、アスファルトの往來をチャラ〳〵と散歩して居る。何とも堪らぬ感じがした。無論日本服としては差支は無い。併し當地では、如何にも野蠻な土人



倫敦市タワアブリッヂ

のような氣持がして、何と無く情ない。英吉利人に遇つて、博覽會の爲に來たのかと問はれると、ゾッとする。

氣味の惡いエヂンバラ

第九圖

□七月廿四日夜ロンドン、キングスクロッスを立つて二十五日朝、エヂンバラに着いた。驚いたのは下等の猿のやうな面相の所謂マドロス流の男が、市中到る所に多い事で、氣味が惡くて耐らぬ。併し市中の光景は、巴里を新派の色彩本位の油繪とすれば、當地は昔の銅版畫である。暗くつて重味あり。古い建築や城などの畫材到る所にあつて非常に面白い。着た翌日の日曜日

は、夕刻から宿の裏のカルトン、ヒールに音樂があつて、淫んだ處に樂隊が古風な服裝を着けて、奏樂をやつてゐる。其周圍の山々には又間拔けな風をした男女の群集が皆露天に立つて聞いてゐる。ヒールの向ふに、黑い森が見へ、其後に尖つた寺の屋根や、突立つた煙筒などがあつて、まるでウキルキー時代の英吉利の繪を見るやうだ。

□其中を顏色の全く異なつた自分が歩くと、群集は音樂よりも此方の顏を見て異樣な顏をして居る。倫敦から來る途中、ニユー、カツスルから、南に、ダラムと云ふ古い町がある。凸凹の岡に町が出來て居る。其所に古い有名な寺院がある。市街の光景は何とも云へぬ程面白い。歸りに一つ下車して見やうと思ひながら汽車の窓から打眺めた。

□エヂンバラには二週間許滯在した。夏期、倫敦から蘇格蘭行の汽車賃は、特別の大割引で、普通の殆ど半額である。尤も其臨時列車は時間迄が定まつて、何れも夜

蘇格蘭ヨリ倫敦ヘ行キ途中ヨリ撮影セル

行である。で、倫敦のキングスクロッス、ステーションを立つたのが、夜の九時五十分、三等でも日本の二等より遙に立派で乘心地がよい。エヂンバラ迄四百哩餘と云ふが、約八時間で、朝の六時に着いた。

口線路は、ヨーク、ダラム、ニユー、カッスル、ワーウイックと東海岸を通るのだ。ダラムで夜が明けた。併し時計は未だ三時である。三時で夜が明けたとは何んだか嘘の樣であるが、スコットランドに來て、日は益々長くなる。三時に既に夜が明けて、夜の十時で無ければ暗くなら無い。こんなことを日本の人々に話しても、本統に信ずる者は無いと思ふ。ニユー、カッスルはそれから約一時間餘と覺えてゐるが、町の體裁が面白い。北に進めば進む程、倫敦附近の四角四面な線を破つて、大に變化に富むで來る。

口思はず眠つた間に、エヂンバラーのウエーヴアレー、ステーションに着いた。ステーションは町を東西に貫いて居る谷の中央にあるのだ。東京で云へばお茶の

水の河の水を無くして、其處を一面のステーションにした樣なもので、ステーションの上に、ノース、ブリッヂ、ウエヴアレー、ブリッヂと云ふ大きな二ッの鐵橋が架かつて居る。此谷の南が昔の舊市街、北が新市街である。

口着く早々ステーションを出たが、何處に宿屋があるのだか、一向に解らぬ。併し朝だから、宿屋は急ぐ必要がないので、荷物萬端をステーションに預けて町に出かけた。早朝なので、未だ淋しい。第一に眼に這入つたのが高い岩山の上に建てられた城である。空には今にも暴風雨襲來かと思はれる許りの雲が一面に起つて、其城と雲との對照が立派な繪であつた。城の下に、ナショナル、ギャレリーの黑ずんだ大きな建築物が見える、其右手にはウオター、スコットの紀念碑が空衝く許りに樹木を越て聳えてゐる。總て市街の家屋は倫敦邊で見られぬ古風なもので、中には自然の岩石を利用して建てられた家なども見へた。

口町の東北に、前に云ふた、カルトン、ヒールと云ふ丘陵がある。一帶の芝山で、ネルソンの紀念碑などが建てられて、其所に登ると、エヂンバラ市の全面は、城を背景とし、一望のうちに眺められる。兎に角凸凹した地形を聊も意とせず、思ひ切つた高い大きな建築物を無闇に重ねてあるのだから、其圖樣は他の市では一寸見られぬ。それに、キングス、パークと云ふて市の東南に非常な大きな山がある。樹木は殆ど無く、一面の芝山で、諸所に、岩山が顯れてゐるばかりであつて、丁度奈良の三笠山を一層大きくした樣な山である。此山には山羊や綿羊が無數野飼になつてゐる。それから市の北に、レースといふ港があり、ニューヘヴンといふ漁村がある。東の方にジョッパと云ふ所が海岸に添ふて

エヂンバラ郊外

ゐて、其所のボートベローと云ふ濱には水泳、漕艇、其他海上の遊戯が、殆ど完全に

備つてゐる。

□それから又た西南に、ブラック、ブホードと云ふ大きな芝山の公園がある。其附近には金滿家の邸宅が連なつてゐて、丁度日本の赤阪か麻布と云ふ氣持の處だ。各庭園の花壇には、何れも誇顏に各種異樣な草花が咲き亂れてゐる。日曜日には各公園で音樂がある。

□繪はナショナル、ギャレリー、ポートレエト、ギャレリーを始め各展覽會に何れも名畫が陳列されてある。概略列べると、先づこんな具合で、如何にも樂しさうな愉快さうな處のように想像されるが、事實は中々さうでない。如何にも不愉快で二週間の滯在は、自分にとつては非常な忍耐と勇氣を要した。

□其不快の原因は何かと云ふと、エヂンバラーに住んで居る無數の貧乏人である無宿同然の立ん坊である。マルセーユ、リオン、ジエネヴ、パリー、ロンドン如何なる地も乞食の澤山居ぬ處はないが併し何處でも、乞食は自づから乞食相應の禮

儀を守つてゐる。如何にも乞食らしい謙遜がある。處がエヂンバラでは、中々さうでない。首に襤褸を捲付けて、破れ洋服と裂けた古靴を足に纏ひながら、それで一廉の市民然たる顏をしてゐる。ステーションは勿論、第一の大通プリンセス街を始め、各公園、其外到る所に徘徊してゐる。

□彼等の面相は、倫敦邊で稀に見る險惡な、スコッチ式の人相で、まるで猿のやうな恐ろしい顏をしてゐる大男を屢々見懸けた。彼等は旅客と見れば新聞や繪葉書を賣付けやうとする。其最も下等なのに至つては、ペニーのマッチ或は汽車の時間表などを持つて來る。其他何物をも持つ事の出來ぬ、更に一段下等なのもある。日本人たる自分の獨り旅を見かけて、名所の案內をしやう、或は甚敷きに至つては、一杯のカヒーを奢れと、言葉をかける者もあつた。是等の下等細民は自分が畫架を開くや否や、必ず周圍に來て離れぬ。裸足の小兒は無數である。

□寫生の時困つたのは、是等の子供であつた。彼等は自分を見れば、マッチを持た

ぬかと云ふ。試にマッチを與へて見たら、彼等は往來にて捨てゝある卷煙草を破れた服のポケットから取り出して吸ふ。彼等の面相は血を有たず、眞に骨と皮ばかりである。唯青いのは、眼で、赤いのは頭髮ばかり。隙あれば、何か惡戲をしやうと

惡戲小僧

一刻も油斷が出來ぬ。寫生するのに、何時も二ッの注意を要した。一は寫生する繪の位置、一は貧乏子供の惡戲を試み難き位置。此二つの注意は聊も忽にする事が出來ぬ。とは、偖も厄介な話では無いか。

□自分は一日舊市街第一の大道ハイ、ストリートに行つて、カノン、ゲートのジョン、ノックスの住むで居たと云ふ家を見に行つた。すると、何用あつてか、此町にも例の立ん坊然たる賤民往來に佇立すること無數である。自分は氣味惡く思ひながら約一町程行つたが、果して一人の大男が出てきて、汝は日本人ではないか。一

緒に酒を飲みに來ぬかと仁王大の手を出して握手を求める。其顏色の險惡なと其服の穢れ切つたに、自分は我知らず戰慄して、直ぐ樣元の道に引き返した。

□彼等は自分が恐れて逃げ出したと思ふたか、此方を見て、頻に冷笑して居つた。察するに彼等は殆ど一日一片のパンさへ口にせぬであらう。日中既に此有樣だから、夜間日本人の自分が單獨の散歩は、迂闊と滅多な處へは足を踏込めぬ。自分は夕食後の散歩區域を宿の附近、最も繁華な郵便局と、スチーション近傍に定めて居た。

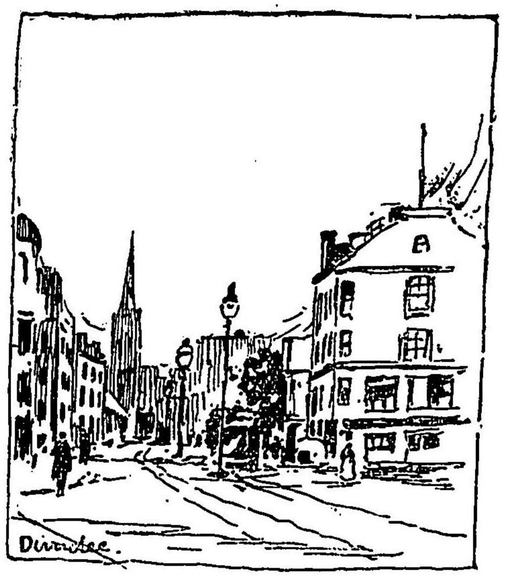
□賤民でない普通の人も、生温かい地中海の風に吹かれ、葡萄酒に醉ふてゐる佛蘭西南部のそれらとは、殆ど正反對の風である。物言へば損をすると云ふ調子は總てのものゝ上に顯れてゐる。特に婦人の無愛想で慳貪なのには寧ろ、滑稽に感じたことが屢々あつた。一ヶ年の四分の三を寒風と霧に攻められ、強いウキスキーによつて僅かに生命を繋いでゐる人間としては、此一種頑狹な性質も自然致

方なきことは知つて居るが、異郷の孤客に取りては如何にも不愉快千万の事である。

又と來る氣の爲ぬダンヂー。グラスゴ

□七月二日の朝。エヂンバラを立ち、午後一時にダンヂー町に着いた。此所には畫堂の佳いのがあると聞いて、態々來た。途中の風景は面白いと云へば云へる樣なものゝ、皆ホンの素人向きで、聊かも自分等は有難くなかつた。こんな好き處は日本にもあるかと、お國自慢の蘇格蘭人は云ふけれど、殆ど日本の風景で、歐洲大陸に比べれば面白いだらうが、自分は錢を使ふて、こんな景色を態ゝ見にくるのは愚の極と思つた。町は益々下等、其同じ下等がマルセーユ邊とは違つて、ゾヅとするやうである。安いウキスキーに醉つた其氣息が、到る處に充ちてゐるやうな氣がする。

□今度蘇格蘭に來て、西洋はック〳〵と厭になつた、特にダンヂーの町に來て一層その感を強くした。到る所立ちん坊多く、血の氣の無い牢獄から引出された樣な貧民が大手を振つて大道を歩て居る。彼等の面相は繪で見るトーマス、カーライルにそつくりだ。自分は町を歩いて居て一寸でも立止ることが出來ぬ、立止ると直にカーライル先生が何所からとも無くやつて來て、案内をしやうとか、又好い宿を紹介するとか云ふて、恐ろしい眼と齒をむき出して頻りに話しかける。



ダンヂー

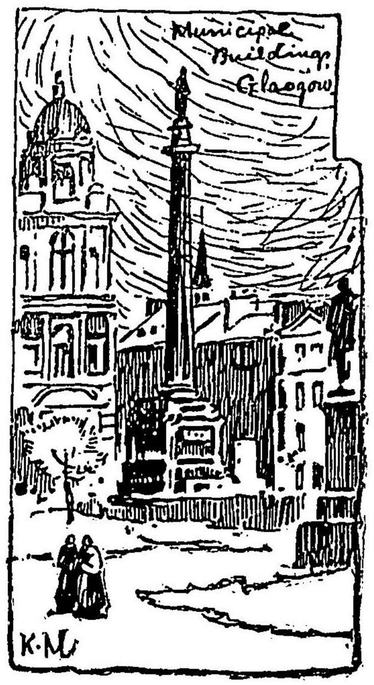
□ダンヂーの町では取敢えず美術館に這入つた。建物と云ひ又陳列してある繪と云ひ中々立派なものがあつた。唯

驚いたのは館内に乞食のやうな襤褸を着た貧民が多く居たことである。風呂敷包を持つて居る。籠を下げて居る。傘を携へて居る。こんな不愉快な美術館は今迄に聞たことも亦見たことも無い。而かもこれが石造の素晴敷い陳列館内に群を爲して居るのだから、その對照が如何にも妙だ。妙と云ふよりも凄味があつて、落着いて繪などは見て居られぬ。この美術館の入口には傘や荷物を預る場所が無い。自分は不得已肩から寫生道具や畫架や傘をぶら下げて館内を廻つた。

□美術館と市街各所の見物を終つたが、既う二日と滯在する氣は無く、其日又エヂンバラに引返した。愈々北に來た所爲か天氣は益々陰氣で、氣も心も鬱して到底自分等には堪へられぬ所だと思つた。偶公園に行つて見たが、流石にその設計の完備して居ることは、矢張何所迄も大英國であると思つた。咲亂れた花園の内に腰を下して、暫時冥想に耽つた。向ふ山に薄日が僅に當つて、空は一面の黑雲が墨を流すやうで、雨は頻に降り、どうしても世界の片隅のやうな氣がする。

□七月六日。エヂンバラを立つてグラスゴーに行つた。途中日本の風景と同し樣な場所を屢々見る。丁度入梅時に日本を旅行して居る樣な感じだ。空は朝から墨の樣になつて、小雨が蕭々と降り、一町先は霞んで見えぬ。グラスゴーの町も雨でグシャ〳〵。相變らず底光の眼を放つた立ん坊此所にも澤山居る。

□グラスゴーの美術館は非常なもので、豫て寫眞のみで見てゐた畫の現物にお目にかゝる。ウイッスラーのカーライルの肖像は、巴里ルクサンブール美術館のおつ母さんの繪と好一對である。コローの Pastorale souvenir D'Italie. は非常な大幅で、コローの斯樣な大幅は茲で初めて見た。其他和蘭畫家の近代の作もあり、大に新らしい智識を得た。



グラスゴー

□茲に書き添へたいのは天候の事である。空は日光、箱根山中の樣に晴雨定りなく、晴天と見えても、容易に油斷は出來ぬ。自分が滯在中一月として、雨の降らぬ日とてはなく、風景畫家に對して、變化激しい自然の妙を屢々認むることはあるが、これを寫す困難は一通りの骨折ではない。若し日本のやうな國で寫生が出來ねば、彼地などでは、山一つ雲一つ寫すことは出來ぬと云ふ事を感じた。而かも、ソサイチー、オフ、スコッチシユ、アーチストの展覽會に行つて見ると、其絶えず變化するスコットランドの風景は、如何にも巧に描かれてある。

□雨は彼地の名物であらう。晴れた青空に急に雲が起つて、忽ちの間に大雨となる。綠の木も赤瓦の屋根も皆一面の灰色と變化する。世の終ではないかと思はれる程暗くなる。併し一時間もすると、又日光が照つて、晴れて來る。斯樣なことが日に二三回もあることがあつた。それでも日光が出る日は、現に雨が降つてゐても、好い天氣ですねーとか云つて、雨天の部に入れずに互に挨拶して居る。雨中傘を

翳さぬのも亦彼地の名物であらう。勿論貧乏で、傘に迄及ばぬ手合もあらうが併し普通の人々でも、濡れて、平氣で歩るいてゐる。雨が濃い灰色の空から、横吹の風に交じつて、盛んに降つてゐる。其中を濡れた儘往來の人々が織るやうに歩て居る。中には例の裸足の子供が濡鼠のやうになつて、歩いてゐるのもある。見たばかりで自分は何となく一種悲慘の感に擊たれた。

□エヂンバラを立つた日の夕刻も雨で、列車の窓に吹き付けること夥しい。直ぐ、一二町のスコットの紀念碑などが、薄墨で、一刷毛やつたやうな具合に、朦朧と見える許りで、他は一面の濃い灰色である。斯る天氣にも拘はらず、遙に西の方を見ると、細い雲切がして紅色の夕日が其間から漏れてゐる。日本などでは到底見られぬ異樣な空合であつた。

□エヂンバラを發して間もなくダンバー、バーウキックと云ふ所を通過するが、此邊は一帶の海岸で、宛て英國の繪に見た通りの景色だ。綠の牧草が見渡す限り

生へてゐる。草原の岡の麓には黑い岩石が連なつて、其所には赤瓦の漁夫の家が二三軒見える。漁夫の家の煙突からは、靑白い煙が濱風に吹かれて、哀れげに立ら上つてゐる。實に何とも云へない氣持である。汽車の窓を透してこんな風景を見ると、又引返して見たい氣も起る。併しこんな處にも亦例のトーマス、カーライルがゐるかと思ふと、厭になる。

ウキンゾルに來て蘇生の思ひ

□七月十一日、エヂンバラを經てウキンゾルへ舞戻つて漸く蘇生し、先づこれで一安心と云ふ氣がした。茲で此ウキンゾルの宿と其邊の樣子を紹介しやう。所は有名なウキンゾル城のあるテームス河畔のウキンゾルである。宿はキングス、アームス、ホテルと云ふて、嘗て、白瀧幾之助君や、南薰造君が屢々行かれたと云ふ日本の畫家には緣故の淺からぬ宿である。實は自分も倫敦の武内君の紹介で來たのであるが倫敦からは約一時間許りかゝる。來て見て第一に氣に入つたのは、四邊の極めて靜かなことと、風光の英國特殊の何とも云へぬ深い空氣が、全景を包んでゐることであつた。

ウキンゾル城

□ウキンゾル城は町の家の屋根高く聳えて、嘗て寫眞や繪で見て想像してゐたよりは數倍も雅致がある。宿屋はステーションを出て直ぐ近くのテームス河畔、向河岸がイートンの町で、部屋の窓から赤い屋根や、黃色の壁や、綠の樹木が、自然の面白いコムポションを作て殆ど一幅の繪である。而して河流には白い雪の樣な白鳥が浮いてゐる。何んとも堪らぬ景だ。

□宿の前はテームス河を上下する廻遊船の碇泊所で、夕方になると、船が幾艘と

なく河岸に集まつて來る。其又船頭や船長殿が上陸すると、往來を流して歩るく樂人がヴアイオリンの悲しい音を聞かせる。宿の主人は英人には珍らしい小柄の男で、それに愛想の好い處は、一寸佛蘭西人の樣な處がある。主婦は中々の大女で、息子と娘がある。自分が宿に着て、白瀧、南兩君の友人だと話すと、悦んで迎へて、早速二階の見晴しの好い一室を借してくれた。

口この宿にジャックと云ふ犬が居る。亭主は此犬をミスター、シラキ(白瀧君のことをシラキと云ふ)の友人だと紹介してくれたが、其犬が非常に悧巧な犬である。悧巧な犬は英國には甚だ多い。先日倫敦の某酒屋に畫家クイン及び武内諸君と一緒に這入つた時、犬が客の顔を見て錢を要求する。即ち客の顔を見上げて、ワン〳〵と泣く。そこでペニーの銅貨を床に投げると、直ぐに見附けて口に啣へて帳場の臺の上に駈け上つて、一つの箱に入れる。客は感心して、又々ペニーを投げ與へる。犬は一生懸命に拾ふ。其ペニーは市の慈惠病院に寄附するといふことだが、

英國ウキヤクとマンチエスター